南山大学社会倫理研究所・上智大学生命倫理研究所共催

公開シンポジウム 2016 講演録

持続可能な発展は可能か

回勅『ラウダート・シ』を複眼的に読む

日時：2016年 10月 22日 (土)
14：00 ～ 17：30

場所：南山大学 名古屋キャンパス
B 棟 2階 B21教室

篭橋一輝編

南山大学社会倫理研究所
2017年

目次

004　開会の辞　南山大学社会倫理研究所長　丸山 雅夫

006　南山大学学長挨拶　南山大学 学長　ミカエル・カルマノ

008　第一報告

持続可能性に向けた関係性の再構築と“総合的なエコロジー”

上智大学神学部神学科 講師　吉川 まみ

020　第二報告

現在の環境倫理学の観点から見た『ラウダート・シ』

南山大学外国語学部英米学科 教授　神崎 宣次

034　第三報告

回勅を神学的に読むか、哲学的に読むか?

南山大学人文学部キリスト教学科 准教授　佐藤 啓介

050　各報告へのコメント　南山大学社会倫理研究所 講師　篭橋 一輝

058　全体討論

072　閉会の辞　上智大学生命倫理研究所長　滝澤　正

074　あとがき

開会の辞

丸山 雅夫
南山大学社会倫理研究所長

【司会（篭橋）】　皆さん、お忙しい中お越しいただいて、どうもありがとうございます。それでは、今日の南山大学社会倫理研究所・上智大学生命倫理研究所共催シンポジウムを始めさせていただきたいと思います。

まず、開会の辞としまして、南山大学社会倫理研究所長、丸山雅夫より一言ご挨拶を申し上げます。

【丸山】　みなさん、こんにちは。本日は、何かとお忙しいなか、南山大学社会倫理研究所と上智大学生命倫理研究所の共催による「公開シンポジウム2016」に足をお運びいただき、ありがとうございました。心より、お礼を申し上げます。この公開シンポジウムも今回で6回目を迎え、わが国のカトリック大学における連携のひとつの形になっているように思います。両研究所はそれぞれ「倫理研究」という点で共通の基盤に立ってはおりますが、シンポジウムの具体的なテーマ設定には少なからず困難が伴い、毎回苦労しているところであります。前回は2015年12月12日に、上智大学を会場校として「環境と倫理」をテーマに開催されましたが、その直前の6月18日には、教皇フランシスコによって、環境に関する回勅「ラウダート・シ（主に賛美）」が公表されていたところです。

ローマ・カトリックの教皇による回勅は、1891年のレオ13世による「レールム・ノヴァールム（新しきことがら）」以降、道徳や倫理、生命、社会問題、世

界平和、開発といった事柄について積極的に発信し、カトリックの世界だけでなく、世俗の社会にも大きな影響を与えるとともに、社会のあり方を変える大きな原動力となってまいりました。2015年公表の「ラウダート・シ」は、すでに日本語訳も出ておりますが、地球規模での環境問題への適切な対応、さらには世代を超えた環境のあり方を模索し続けている現在の社会にとって、きわめて重要な提言をしております。こうしたことから、本年度のシンポジウムでは、「持続可能な発展は可能か　回勅『ラウダート・シ』を複眼的に読む」をテーマとして、環境問題についてさらに踏み込んだ議論をするための一助となるようにと計画した次第です。

私は刑法解釈論を専門とする研究者ですが、1980年の改正ドイツ刑法が324条以下に環境犯罪対策を規定したことを契機として、1980年代のドイツを中心に環境刑法の研究が盛んになりました。わが国においても同様の状況が見られ、私自身も、刑法による環境保護のあり方についていくつかの論稿を公刊したことがございます。しかし、現在では、ドイツにおいてもわが国においても、環境刑法研究はすっかり下火になっております。環境犯罪対策法も、最終手段である刑罰によって環境を保護する必要があることを宣言した、象徴的な立法としての意義にとどまるとの評価が一般的なものになっています。おそらく、それは、限定的な場面と方法論とで環境問題を論じることの限界が認識されたからだと思われます。環境をめぐる問題は、さまざまな場面でさまざまな切り口で語ることができますし、そうでなければならない事柄でもあります。こうした状況のもとで、環境問題について積極的な提言を行っている「ラウダート・シ」を読み解く企画は、きわめてタイムリーなものと自負しているところです。

厳しい名古屋の暑さも過ぎて、すっかり秋らしい気候になってまいりましたので、どんなに白熱した議論を交わしても熱中症になる心配は全くありません。是非、安心して議論にご参加下さい。では、本日のシンポジウムが今後の環境問題を考える際のひとつの指針になるよう祈念して、開会の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

（拍手）

南山大学学長挨拶

ミカエル・カルマノ
南山大学 学長

【司会（篭橋）】　続きまして、南山大学学長の挨拶としまして、ミカエル・カルマノよりご挨拶申し上げます。

【カルマノ】　カルマノです。このシンポジウムに参加してくださったことに心から感謝いたします。上智大学、南山大学といえば、大体の人は上南戦を思い浮かべると思います。３日間喧嘩して別れる上南戦ですが、それだけでなく、実際、昔からこういうシンポジウムとその他の研究会で、上智大学と南山大学は協力してきました。これはカトリック大学同士であるからこそやれることだと思います。

特に今日のテーマは、まさにカトリック大学としては一番重要なテーマだと思います。「持続可能な発展は可能か」という問いが設定されていますが、それを可能にするためにどうすればよいかということを私たちは考える必要があります。複眼的に読むということで、神学の立場と自然科学の立場の区別もほとんど意味がなくなるのではないかと思います。

実際に教皇フランシスコが『ラウダート・シ』を発表したときに、いろいろな方面から批判が出ました。教皇という立場からは、神学、聖書学的に捉えるべきであり、自然科学に基づいた声明を出すことはない、という批判がありました。実はそのような意見は今でもあり、自然科学に否定的な人たちから多く出されたわけですが、今日のシンポジウムで複眼的な視点から『ラウ

ダート・シ』を読むことで、私たちが何を本当に求められているのかということを一緒に考えたいと思います。

ぜひこのようなシンポジウムを、今後も上智大学、南山大学で一緒に開催できれば嬉しく思います。今日は本当にありがとうございます。

（拍手）

【司会（篭橋）】　どうもありがとうございました。それでは早速ですが、始めさせていただきたいと思います。申し遅れましたが、私は今日、司会と討論者を務めます南山大学社会倫理研究所第一種研究所員の篭橋一輝と申します。よろしくお願いします。

まず最初に、今回のシンポジウムの趣旨説明をさせていただきます。既にお話があったように、2015年に『ラウダート・シ』という回勅が出されました。地球環境問題の文脈では「総合的なエコロジー（Integral Ecology）」という概念が提唱され、環境問題を社会的な問題や経済的な問題、あるいは人間性の問題としても包括的に考えていくことが提起されています。今回は、異なる３名の専門家の先生方をお招きして、キリスト教、カトリックの回勅として出された『ラウダート・シ』をそれぞれの視点からどのように読み込むことができるかをご報告いただきます。

その後、休憩を挟みまして、私のほうから討論ということでいくつか論点を出させていただいて、フロア討論に移るという流れで進めたいと思います。長丁場になりますが、よろしくお付き合いください。

第一報告

持続可能性に向けた関係性の再構築と“総合的なエコロジー”

吉川 まみ
（上智大学神学部神学科 講師）

【司会（篭橋）】　第一報告としまして、上智大学神学部神学科の講師で、環境学がご専門の吉川まみ先生にご登壇いただき、「総合的なエコロジー」という考え方を「関係性の再構築」という観点から読み解いていただきます。吉川先生、よろしくお願いします。

上智大学神学部の講師の吉川と申します。今日は第一報告ということで、「持続可能性に向けた関係性の再構築と“総合的なエコロジー”」と題して、プレゼンさせていただきたいと思います。

第１報告ですので、まず最初に『ラウダート・シ』がどういうものであったかについて簡単に触れてから本題に入りたいと思います。

『ラウダート・シ』は、2015年に教皇フランシスコが出した環境問題についての社会回勅で、次のような構成になっています。まず第１章で、私たちの暮らす地球に何が起こっているのかという点について、科学的根拠も踏まえて環境問題を概観し、第２章では世界をつくった創造主を思い起し、第３章では、人間がそこで何をしてしまったのか、生態学的危機の原因は人間にあるということを指摘しています。そして、第４章で、どのように問題に取り

組んだらよいのかという指針が示され、第５章で、これから私たちがとるべき行動の具体的な展望が示されます。そして最後に新しい生き方を提案し、「被造物とともにささげるキリスト者の祈り」と、すべての人々とともにささげる「私たちの地球のための祈り」という２つの祈りを挙げています。

第４章のタイトルにもなっている「総合的なエコロジー」は、これからの私たちの在り方を示すキーワードとして示されているのですが、元は「Integral Ecology」という言葉です。インテグラルなエコロジーとはどんなエコロジーであるのかを考えながら読んでいくことで、『ラウダート・シ』全体の理解が深まると思います。

全体として、環境や自然の問題はその他の多様な分野の諸問題と切り離して考えることはできない、人間の問題と切り離せないということを強調しています。特に、地球環境の脆弱さと、社会の中で排除される人々、弱い立場の人々との間には密接なつながりがあるのだという見方が『ラウダート・シ』の特徴のひとつでもあります。さらに、破壊的な消費主義は、根源的には私たち人間の内面の「霊的な渇き」が原因であるということを述べています。

「インテグラルなエコロジー」のほかに「エコロジカルな回心」「エコロジカルなスピリチュアリティ」、そして、これらを育むための「エコロジカルな教育」といったキーワードが、キリスト教の信仰と環境問題を考えていく上でも新しく非常に重要になってくると思われます。

ここで先に、私の結論めいたことを申し上げますと、このシンポジウム全体のテーマであります「持続可能な発展」に向けた文脈で『ラウダート・シ』を読み、カトリックの立場から「環境問題」と「持続可能な発展」を考えるということは、そもそもインテグラルなものとして創造された人間存在を問い直すことでもあり、『ラウダート・シ』はそこへの呼び掛けでもあるということをお伝えしたいと思っています。

また、キリスト教ではしばしば、私たち人間も被造物の１つであり、その「いのち」の造り主こそが創造主であるという、「いのちの根拠」が示されるわけですが、この『ラウダート・シ』で明確に述べられているのは、それだけではなくて、いのちを持つ被造物間のつながり、つまり「いのちの秩序」がどのようになっているのかということだと思います。自然界における遺伝子や種の相互連関性や生命の循環といった言葉がありますが、いのちの相互連関性や循環というのは、それが全体として１つの調和を保つ中で、それぞれが固有の働きをしているということです。自然界の秩序を見るとき、私たち人間相互の秩序も同様であって、こ

のひとつの世界の調和の中で、すべての存在が何らかの役割を持ち、全体の均衡にとって何ひとつ意味のないものはないという理解を『ラウダート・シ』が促しているのではないかと思います。

詳細についてはこれからお話ししていきたいと思いますが、どのように根本的に人間存在を問い直すよう呼び掛けているのか、そして、『ラウダート・シ』が「いのちの根拠」と「いのちの秩序」の回復をどのように展望するのかをお話ししたいと思います。

具体的な話に入っていく前に、最初に「Integral」の訳語についてコメントをしておきたいと思います。もし『ラウダート・シ』の訳本をお持ちの方は、訳者あとがきのところをご覧ください。本文より先に後書きを読まれると分かりやすいかと思います。私も翻訳作業に参加させていただきましたが、第４章は環境倫理のご研究をなさっている上智大学の瀬本正之先生が翻訳され、あとがきも瀬本先生が書かれています。233ページにありますように、本回勅の目玉とも言える第４章のタイトルに関して、「エコロジー」を修飾して「総合的な」と訳出されることになった「Integral」という形容詞の日本語訳にまつわる難しさについて書かれています。

スライドでも示していますが、カトリック教会は伝統的に、「Development（発展）」や「ヒューマニズム」という言葉の修飾語として「Integral」という言葉を非常に重視して、繰り返し使ってきました。なぜならば、それが人間の存在や有り様、本来の姿を表しているという考え方に立脚しているからです。「Integral」は「全き」「傷の全くないもの」という意味で、今までは「全人的な」と訳されることが多かった言葉です。人間の存在を「欠けなく」肯定し、丸ごと受諾する人間理解という、カトリックの中で伝統的に非常に大事にされてきた「Integral humanism」と、それを保証するものである「Integral ecology」の訳語として、本来「全人的なエコロジー」と訳したかったわけです。

やはりここは、意味から言って「全人的なエコロジー」という訳語が正確ではないかと思われたのです。ただ、「全人的な」というのはカトリック教会の外では一般的に使われる言葉ではないし、意味が取りにくく、分かりにくいということへの配慮から、最終的に司教団が「総合的なエコロジー」という言葉を使おうとお決めになりました。訳語としては「統合的な」という言葉の案も出るなど、ここの訳だけでも３カ月間にわたる議論を重ねて、最終的に司教団のご判断に委ねたという経緯があります。

インテグラルな姿というのはどういうことかということを含めて、またこれも後ほどお話しします。私は神学部に所属していますが、環境学が専門です。環境学は複合新領域と言われる文理融合の領域ですが、その中でもキリスト教ヒューマニズムという価値観に基づいた環境教育を専門にしています。自分の専門領域も引用しつつ、『ラウダート・シ』を読み解いてみたいと思います。

環境教育は省エネや3R、植林活動といったイメージがありますが、環境教育論として国際的に体系化されてきた枠組みの下では、「人と人、人と自然との関係性の再構築を含む全ての生態学的関係の再構築」が環境教育の目的であるとされています。これは1975年の国際会議でのドキュメントの文章です。

この「関係性の再構築」というのは、『ラウダート・シ』を読んでいく中でも非常に重要なキーワードになるかと思います。なぜなら、キリスト教では、本来あるべき神との関係、本来あるべき秩序、関係性が壊れた状態を罪と考え、その意味での構造的な罪として環境問題を捉えるという見方がベースにあるからです。

上智大学の母体であるイエズス会はカトリックの男子宣教会ですが、グローバル化した世界で分裂し傷ついたさまざまな関係を和解へと導くべく、「人間相互の和解」、「被造界との和解」、「神との和解」という「三つの和解」というものを提示しています。

一般的な環境論の中でいう「人と人の関係性の再構築」は、イエズス会が言う「人間相互の和解」、「人と自然との関係性の再構築」は「被造界との和解」に対応するものとして考えると、一般的な関係性の再構築とイエズス会の言う関係性の再構築の違いは、「神との和解」、すなわち神との関係性が前提にあるかないかという点にあります。神との関係軸の有無が、環境問題を考えるうえでどのような相違にあらわれるのかということを見ていきたいと思います。それが持続可能な発展の下での「総合的なエコロジー」の理解に、非常に助けになるのではないかと思っています。

まず、環境問題は、高度経済成長期の産業公害や生活型公害のような地域環境問題から始まり、その後に地球規模の環境問題が登場しました。その後、目に見えないタイプの環境問題、化学物質とか環境ホルモン、近年では放射性廃棄物の問題はもちろんですが、宇宙ゴミなど、私たちの日常生活の中では視界に入らない環境問題も論じられるようになってきています。これら科学技術開発の流れに沿って、新しいタイプの環境問題も出てきてい

ます。それらの問題に対する国際会議の動向としてどのようなものがあったのかというと、1972年に国際会議としては初めて、「Only One Earth（かけがえのない地球）」というキャッチフレーズで知られている「国連人間環境会議」が開かれました。この会議で、貧困問題の解決なくして環境問題の解決はないということが明確に宣言されています。

その後、「持続可能な開発」の概念が登場し、自然資源の問題だけではなく、環境と開発の両立をどう可能にしていくのかが国際会議の共通の課題になってきました。それが1990年代のことです。

その後、「国連ミレニアム開発目標」や「持続可能な開発会議」が行われ、最近では、自然の問題だけではなく、経済、社会の問題、３側面を統合していくという考え方が具体的に出され、この前提で持続可能な開発のためのさまざまな会合が国際的に開かれています。近年の国際会議で中心的な課題となっているのは、持続可能な消費と生産パターンに向けたライフスタイルの転換です。自然資源の枯渇へと突き進む破壊的な消費パターンを、いかに転換するかが喫緊の課題になっています。

このような開発と環境の国際会議の流れに呼応する形で、環境教育でもライフスタイルの転換のための意識転換という役割が意識されるようになっています。先ほどお話ししたように、そもそも1975年に環境教育の目的は「全ての関係性の再構築」と表現されましたが、1977年の環境教育の会議では、そのアプローチとして、さまざまな環境問題の文脈でよく使われる「Think Globally, Act Locally」という行動指針が出されています。

その後、「持続可能な開発」という言葉も広く流布し、1997年の国際会議では、「Environmental Education」、「環境教育」という用語の意味は狭いということで、「環境と持続可能性のための教育」と表現しても構わないと宣言されました。

そこから「Education for Sustainability（持続可能性のための教育）」がはじまり、その後、「ESD（持続可能な開発のための教育）」とか、近年では「ESC（持続可能な消費のための教育）」が国際的に取り組まれています。日本もこの影響を受けて、「消費者市民教育推進法」が閣議決定されたりしています。

これらの動向は良い動きではあるとは思いますが、一方で、それでもなぜこんなに環境問題は悪化し続けるのかという点で、やはり根本的に環境問題を再考していく必要があるのだと思います。

そもそも「環境」というのは何を意味するのか、「環境」というのは誰にとって、一体何が問題で、何が原因であるのかということです。問題であると言うからには、人や環境について「あるべき姿」の基準があるはずです。それがないのに、やみくもに「問題」と言うのはいかがなものかということで、いろいろ考える論点はあるのですが、『ラウダート・シ』のほうには、このように書いてあります。

「私たちは、後続する世代の人々に、成長しつつある子どもたちに、どのような世界を残そうとするのでしょうか。世界がどのような意味を帯び、どんな価値があるものなのかを考えます。そして、環境問題は「私たち自身の尊厳こそが危機にさらされていると理解する必要がある」と述べています。

では、そもそも環境というのは何なのだろうと考えると、私たち人間をグルッと取り巻く外の環境に無意識のうちに視点が行くのですが、よく見てみると、人間に外在する環境は自然的な周辺環境だけではなくて、「人工的環境」とか「社会的環境」など私たちが生きる世界にはさまざまな環境がありますし、アメリカの宗教発達心理学者であるジェームス・ファウラーという人は、「自然的周辺環境」や「人工的環境」「社会的環境」などを決める人間の価値観を含む内面的な環境を「究極環境」と呼んでいます。つまり、人間の外側にも内側にも環境というものはあるようです。とすれば、「精神的な環境」とか「スピリチュアルな環境」についても広い意味での環境問題ということもできるのだと思います。さらに、どこからどこまでが私の内側で、どこからどこまでが私の外側かなどというのは、実ははっきりと境界線が引けないということがあったりして、内と外とのかかわり合いのダイナミズムにも、やはり生きるリアリティというのはあるわけです。

『ラウダート・シ』の中で教皇フランシスコは、人間性の刷新なしに自然とのかかわりを刷新することは本質的に不可能で、適切な人間論なしのエコロジーなどあり得ないと述べています。「現在の生態学的危機が現代の倫理的、文化的、霊的な危機の何らかの兆候であるとすれば、人間の有する根本的なかかわりを全て癒やすことなく自然や環境とのかかわりを癒やしていくことはできません」と、非常に厳しいことが書いてあります。

私自身も信者ですし、今回は私は『ラウダート・シ』をカトリックの立場から素直に、この中で何を言おうとしているのか理解することを目指して読みました。そのときに思ったのは、信仰の在り方に対して教皇フランシスコから厳しく叱咤激励されてもいるように私は受

け止めました。信仰も生き方も全ての面で刷新しなければいけないと言われているような印象です。

『ラウダート・シ』の中にこんな記述があります。「密接に絡み合う根本的な三つのかかわり、すなわち、神とのかかわり、隣人とのかかわり、大地とのかかわりによって人間の生が成り立つことを示唆しています。この関係性の不調和が罪です」と述べて、「私たちが図々しくも神に取って代わり、造られたものとしての限界を認めるのを拒むことで、創造主と人類と被造界全体の間の調和が乱された」という認識が示されています。つまり、環境問題を明らかに人間の罪として見ているということがここからも分かります。

カトリック教会の中でも「構造的な罪」という言葉がありますが、地球環境問題の原因と特徴として、構造的に環境問題を見るという見方、構造的にこの社会を見ていくという見方で、浮き彫りにされた目に見えないさまざまな問題を重視する姿勢があります。

私は普段、社会の問題を見ていくときに、社会学者でもあり平和学者でもあるガルトゥングの用語「構造的暴力」という枠組みでいろいろな問題を見ています。ガルトゥングは、戦争とか紛争のように直接的な行為者がいる暴力ではなく、直接的行為者は不在でありながらも、社会の構造が不均衡な、不平等な力関係でつながり合っていることから生じる様々な不公正な状況に目を向けます。そのような状況に人間を陥らせる、その正体を「構造的暴力」と呼びます。

この「構造的暴力」という視点で見ていったときに、地球規模の環境問題というのは、離れた世代や離れた地域の自然環境だけでなく、社会的弱者にも影響を及ぼしやすいという面が、顕著に可視化されてくると思います。

ここで教皇フランシスコはこんなことも言っています。「種々の暴力や虐待、最も脆弱な者のネグレクト、自然への攻撃に罪の破壊力の全てがあらわになっている今日の私たちの状況」は、アッシジの聖フランシスコが生きたありようとは似ても似つかぬものであり、本来の被造物のあり方、秩序とは全く違うものだと、現在の環境問題を表現しています。

「環境危機と社会危機という別個の２つの危機にではなく、私たちは、社会的でもあり環境的でもある、１つの複雑な危機に直面している。解決への戦略は、貧困との闘いと、排除されている人々の尊厳の回復、そして同時に自然保護を１つに統合したアプローチを必要としています」と言っています。これは、総合的なエコロジーの説明の部分で使われてい

る一節です。

これは環境問題をとても簡潔に表しています。これだけで起こるわけではないのですが、途上国型の環境問題の構造では、貧困と人口爆発と、環境破壊のトリレンマが起こっています。

先進国型の環境問題は、「大量生産・大量消費・大量廃棄」の悪循環の中で、私たちはより売れる物を製造するための科学技術を発達させ、それによって経済が高度化・活発化する。これは一見、良いことのように聞こえますが、競争が激しくなる世界、そして、資源とエネルギーの消費も拡大していく。このサイクルがどんどん加速化され、知らず知らずのうちに効率主義がささえる社会に暮らしているということです。

『ラウダート・シ』には、1つのキーワードとして教皇フランシスコの造語「Rapidification」という語がありますが、すべてが加速化されるなかで、少しでも効率を上げようと思えば、やはりわれわれ豊かな国は、少しでも弱い国に進出し、専門用語で「資源収奪の構造」と呼ばれるような、人的資源も自然資源も安く手に入れる構造を作り上げていくということです。

環境問題にはこのような二大構造があるといわれています。貧困によって資源枯渇を招く負のスパイラルに陥っている途上国の構造、一方で、大量生産、大量消費、大量廃棄の負のスパイラルに陥っている先進国の構造です。両方のスパイラルを回すのが格差であり、大本にあるのは、富裕国側の技術至上主義、効率主義、そして、私たちの「飽くなき欲求」が生み出すライフスタイルです。環境問題の本当の原因は、私たち一人一人を破壊的な消費に向かわせる私たちの内なる環境の渇きなのだとフランシスコは言っています。

これを解決する道として、『ラウダート・シ』の最後のほう、225番で、心の平安に基づく、「Happy sobriety」、すなわち「幸いな節欲」という言葉をあげています。これは、何かすごく自己犠牲的で、無理して無理して我慢するというのではなく、それ自体、一つの満たされる行為としての「幸いな節欲」です。そのようなあり方を身に付けるために必要なことは、私たち自身との和解も必要なのだと教皇フランシスコはいいます。そのためには、神との和解や、人間相互との和解、自然との和解も不可欠であることは言うまでもないのですが、自身との和解を環境問題の解決への道として強調しています。

一方、関係性の再構築、イエズス会は「和解」と呼んでいますが、本来の関係を結び直すということで、昔からいろいろな文書の中で、さまざまな表現がなされてきましたが、非

常にまとまった文章として分かりやすいものが2008年のイエズス会総会文書「第3教令」に出されています。そこで「神との和解」「人間相互の和解」「被造界との和解」というものが非常に重要であるということを述べた後、それを受けて、和解をミッションとして表現し直している文書が 2011年『傷つけられた世界を癒す』という文書です。

「神との和解」というのは、神との正しい関係を築くという意味での「信仰への奉仕」というミッション。「人間相互の和解」は、他の人々との正しい関係を築いていくという意味での、「正義を促進」するミッション。そして、「被造界との和解」というのは、「正義の促進」の実践を拡大して捉えて、エコロジー問題にも積極的に関与するという、それをミッショナリーとしてやっていかねばならないということを、はっきりと述べています。

では、どのように関係性を再構築するかというと、必ずそこには価値基準や倫理規範というものが必要になってきますが、カトリック教会の場合は、1891年に教皇レオ13世が『レールム・ノヴァールム』という労働者の境遇に関する社会教説を出して以来、カトリック教会の原理と価値に立脚して、さまざまな社会問題に対する提言をしています。これらを体系化したものが「コンペンディウム」で、これは南山大学のマイケル・シーゲル先生が翻訳されています。非常に分厚い本ですが、ここにカトリック教会の価値規範がきれいに体系化されていて、とても分かりやすいものです。この第10章の中で、信者であるわれわれは環境を保護する責務があるということと、それがなぜなのかということについてその根拠を述べています。

そこにも示されていますが、繰り返し言われてきたのは、私たちは神に創造されたものでありながら、他の被造物とは異なる存在であり、私たちは他の被造物を支配するようにということです。旧約聖書の創世記に由来するこの「支配」という言葉はしばしば誤解されていますが、古典言語ヘブライ語の「支配」には、本来の秩序を守りケアするという意味があります。『ラウダート・シ』でこのように説明されています。

「私たちキリスト者が時に聖書を誤って解釈してきたのは事実ですが、今日では、私たちが神にかたどって創造された、大地への支配権を与えられたことが、他の被造物への専横な抑圧的支配を正当化するとの見解は退けなければならない。本来ここで言っているのは、園を耕し守るように言われているのだ」ということです。そして、最後のほうですが、「耕す」というのは、培うということ。そして、鋤くこと、働きかけること、そして、「守る」は、世話し、保護し、見守り、保存することを意味します。人間と自然の関係の間にはこのようなかかわり

が存在するのだということです。

やはり長い間カトリック教会の中にも、誤解している人はいると思いますが、この表現によって私たちに聖書が伝えているのは「守っていきなさい」ということなのだということです。

『ラウダート・シ』でも度々引用されていますが、歴代の教皇がエコロジーについて述べています。ベネディクト16世は「人間のエコロジー」という言葉を使いましたが、ここでも同じように、人間は責任を持って自然を管理し、耕す務めを持っており、環境資源の使用は、全人類、特に貧しい人と将来の世代と自然資源を分かち合うことを必要とすると言っています。そこから、よく環境倫理として、「スチュワードシップ」や「自然に対する責任ある信託管理人」という表現が使われます。

『ラウダート・シ』の中でも、その原理が繰り返されているのですが、それだけではなく、私たちは責任を持って地上の財を使用する義務があるとともに、生き物たちは、人間の側から優劣を付けるのではなく、それ自体に価値があるということを認めるように促されていると言っています。ただ存在するだけで神に誉れを帰する存在なのだと言っているところが、『ラウダート・シ』の中でも非常に重要なことだと思います。

ヨハネ・パウロ２世は、「平和的な社会のためには、生命の畏敬を無視することはできず、また、創造の業の持つ内的統一」と言っています。「いのちの秩序」、その存在一つ一つ、人間だけではなくていろいろな種も、一見何の役に立っているか分からないような微生物も含めて、全てそれが、全体で１つの調和を成すことにおいて一つの役割を担っていて、神から見たら、その役割に優劣は何もないということです。

この『ラウダート・シ』の中でも、環境問題の現状を述べる章で、「種はそれ自体で価値を持つという事実」とか「比較的数の少ない種が、概して目には見えないにもかかわらず、特定の場所の平衡状態を維持するために重要な役割を果たしている」ということを、科学的根拠に基づいて表現したりしています。

実際、その通りで、生物界の均衡がいかに保たれているかを見ていくと、『ラウダート・シ』の言っていることが非常によく分かります。地球環境の存続に生物多様性は不可欠ですが、それは、例えば生き物の種がクマとか魚とか昆虫など多種多様にあるということだけではなく、例えば「テントウムシ」という１つの種にも、７つ星のテントウムシがいたり、２つ星がいたり多様な遺伝子が必要です。そして、熱帯林、湿地、湖沼、平原や里地里山などの自

然の形、つまり生態系の多様性も不可欠です。つまり、種、遺伝子、生態系の３つの多様性があって初めて守られるのが生物多様性です。

それと同じことなのですが、「それゆえ、生態系の十全性、インテグリティについて語るだけでは、もはや十分ではない」と、生態系にも「十全性」という言葉を用い、「さらに私たちは、人間の生の十全性について」、また、「インテグラル・ヒューマニズム」とか「インテグラル・ディベロップメント」という、カトリック教会が繰り返し用いてきた、存在のありよう、インテグリティ、十全性、全一性、両方のインテグリティについて「私たちはその偉大な価値を奨励し、それぞれをさらに結び合わせる必要性について語らねばならない。」と言っています。

まとめの１つになりますが、「神との和解」という、一般的な環境問題のアプローチでは存在しない関係軸の意味についてです。先ほども述べましたが、環境教育の目的を例に取ると、「人と人との関係性の再構築」「人と自然との関係性の再構築」は、イエズス会の表現では「人間相互の和解」と「被造界との和解」に対応しています。「神との和解」、つまり神との関係軸があることでもたらされるのは、本来の神と被造物とのかかわり、「いのちの根拠」と、生態系の十全性、そして、人間の生の十全性と相互のかかわりも含めた「いのちの秩序」というものだと思います。被造物でありながらも他の被造物と同じではない存在である、私たち人間の固有性にもとづく被造界を守る責務、そしてどのような均衡で守るのかという「いのちの秩序」です。『ラウダート・シ』では、単に守るだけでなく、「耕す」、つまりより良い実りをもたらすように育み成長させるという責務も人間にはあるのだと言っています。そういう意味で「全人的な発展」ということを言っているのだと思います。

最後に、『ラウダート・シ』の中心概念である「総合的なエコロジー」ですが、このような私たちの全人的な発展を促す、それを支えるものとしてフランシスコは「総合的なエコロジー」を提示しています。『ラウダート・シ』では「あらゆるものは密接に関係し合っており、今日の諸課題は、あらゆる側面を考慮する必要がある」ということを述べて、さまざまなエコロジーの要素を考察しています。既存のエコロジー概念には、「経済的なエコロジー」「社会的なエコロジー」「文化的なエコロジー」「日常生活のエコロジー」など多様なエコロジーがあり、教皇が言った「ヒューマンエコロジー」とは別の意味でも同様の言葉が使われることがあります。もちろん、これらが間違っているということではなく、それぞれにとても重要な側面であるということです。

それに加えて、信仰を持つ私たちにとって非常に重要なのが「インテグラルなエコロジー」、総合的なエコロジーだということで、人間のさまざまな側面を包括したエコロジー概念です。『ラウダート・シ』では、人間のさまざまなかかわりの次元を４つに表しています。自己とのかかわりである「内的調和」、他者とのかかわり、人間相互のかかわりである「連帯的調和」、自然環境とのかかわりである「自然的調和」、神とのかかわり、スピリチュアルなかかわりである「霊的調和」の４つです。これは、私たち人間とはこれらの次元を持つ存在だという前提に立つもので、だからこそ「インテグラル」という言葉がカトリック教会の中で重視されてきたのです。そして、その4つの次元すべての平衡を保つことが非常に重要なのだということです。

これら4つの次元をそれぞれ4つの円で描き、さらにこれらすべてを含んだ大きな一つの円をイメージします。すると、4つの次元全ての調和を含む人間存在の固有性、全人性を踏まえた大きな一つの円を「インテグラルなエコロジー」として考えることができます。また、これは共通善の原理に支えられなければならないと、先ほどのカトリック教会のコンペンディウムの中で言われています。

最後にまとめです。人間の存在の十全性、生態系の十全性、その「いのちの根拠」と「いのちの秩序」というものを踏まえたときに、そして、人間がいかに生きるべきなのかということを踏まえたときに、信仰に基づく持続可能な発展というのは、「全人的な発展」という言葉で表すことができると気づきます。誰一人取り残されることがないという意味での「すべての人」と、人間が持つすべてのかかわりの次元という意味での「すべての次元」、これらを何一つ欠けることなく肯定し、全人的な人格的発展・成長を助ける社会的条件の総体である「共通善」をもとにした「全人的な発展」こそが必要で、その様子を示したものが「総合的なエコロジー」であるということ、これが今回のシンポジウムのテーマから見た『ラウダート・シ』の重要なメッセージの一つではないでしょうか。

これで、私の報告を終わりたいと思います。

（拍手）

【司会（篭橋）】　吉川先生、どうもありがとうございました。

第二報告

現在の環境倫理学の観点から見た『ラウダート・シ』

神崎 宣次
（南山大学外国語学部英米学科 教授）

【司会（篭橋）】 第二報告では、南山大学外国語学部英米学科教授の神崎宣次先生にご登壇いただきます。神崎先生の専門は倫理学ということで、環境倫理学の立場から『ラウダート・シ』を読み解いていただきます。神崎先生、よろしくお願いします。

こんにちは。神崎宣次と申します。まず自己紹介から始めさせていただきます。私は倫理学者で、環境倫理学などを専門にしております。2016年の４月から南山大学に来まして、外国語学部の英米学科で働いているのですが、そこは一時的にいるだけで、来年の４月からは、新しくできる国際教養学部に移って、そこでのカリキュラムの「サステイナビリティ・スタディーズ」の分野を主に担当することになっています。環境倫理学に関連するところですと、実は最近は宇宙倫理学というものを研究していて、宇宙環境倫理学の話とかもやっているのですが、その話は今日はしないことにします。

さて、まず私は環境倫理学者として、宗教的な意味合いのない、世俗的な環境倫理学の立場からの『ラウダート・シ』に対する全体的な評価を先に述べさせてい

ただきたいと思います。

本書は非常に包括的な、さまざまな話題を扱っていて、なおかつ、立場としてはかなり穏当な立場を述べていると思います。キリスト教にかなり深く関わっている部分を除けば、例えば私が教養の授業でやっている環境倫理学という授業のテキストとして、1年生、2年生に読ませるとしても、全然無理がないようなテキストだと思います。

しかし、そのときに問題になるのは、キリスト教に深く関連している部分はどうなるのかというところで、そこがたぶん議論になると思います。まずこのスライドをご覧ください。これは、京都大学の文学研究科キリスト教学の芦名定道先生の文章です。

リン・ホワイト Jr.（Lynn Townsend White Jr.）という人の名前は、皆さん、聞いたことがある方もいらっしゃるかもしれません。環境危機に対するキリスト教の責任という議論については、リン・ホワイト Jr.という人の批判的な立場からの問題提起がありました。これを無視してキリスト教と環境問題というのは語ることができないのだと、芦名先生は述べられているわけです。

リン・ホワイト Jr.は1967年に、世界的な反響を呼んだ「われわれの生態的危機の歴史的根源」という論文を『サイエンス』に書いているわけですが、大まかに言うと、先ほど吉川先生のお話の中にもありましたが、自然物というのは人間にとっての道具とか資源としての価値しかないのだという考え方が、キリスト教の教えの一部にあるというわけです。そこを変えない限り、われわれは環境危機というものを悪化させ続けるだろうと言ったわけです。

もちろんこれは非常に極端な言い方であって、当然、キリスト教のほうから反論が出ました。もちろん、リン・ホワイト Jr.の議論が非常に乱暴だというのもあるわけですが、ただ、彼は、反論を受けているような内容よりは、もう少しニュアンスに富んだことを述べているということは注意しなければいけません。

例えば、ここの段落を見てください。『ラウダート・シ』のほうでも聖フランシスコに対する言及は何カ所か出てきますが、リン・ホワイト Jr.の論文でも、メインストリームではないけれど、キリスト教の中でも、こういうものとは違う考え方を述べていた人がいたのだということをちゃんと指摘しています。ただし、それはキリスト教のメインスト

リームではなかったので、ここで彼は「正統派のキリスト教の傲慢さ」という言い方をしているわけですが、それを正すような影響力を及ぼすことはできなかったということです。

ですので、ここは彼の論文の結論部分なのですが、ここだけを見ると、あたかも彼が「キリスト教なんて、もう駄目だ」と言っているように見えるのですが、彼はもう少しちゃんと、注意深く書いていて、古い宗教を考え直すべきだと言っているわけです。キリスト教は人間中心主義的だから全部駄目だなんていうことは、彼は決して言っていないわけです。

そして、もう１つ、現在の目から見ると、リン・ホワイトJr.の議論で、全体的な内容を正しいと考えることはできませんが、それでもいくつかの意義は存在しています。おそらく今日の話の中で一番関連する部分がここの部分だと思います。彼のこの指摘です。

「われわれの苦悩の根源はその大部分が宗教的であるがゆえに、その救済策もまた本質的に宗教的でなければならない」。これは確かに、『ラウダート・シ』が環境問題について取っている態度と同じものであるわけです。

いずれにしても1970年代に、環境問題の原因としてキリスト教を非難するという議論が登場してきています。例えば、これは1972年にジョン・B・カブ（John B. Cobb）という、環境哲学と環境神学の間ぐらいのことを書いた人です。実は彼は現在も生きていて、『ラウダート・シ』に対するコメンタリーを編集しています。カブはある著作でこのように書いています。一番上の段落の話は、先ほどのご発表の中で出てきたような話とかぶっていて、少し長いので、真ん中だけ読みます。

「極端な人間中心主義を克服しない限り、人間を超えた仲間である他の被造物への関心の拡大によって、キリスト教の伝統がそれ自体を変容させることなどできないのだ」と、彼は言っているわけです。

さらに下の引用も見ていただきたいと思います。ここで注意点が置かれているのは何かというと、われわれの態度とか物の見方、世界というものをどのように捉えるのかということが、環境問題の解決にとって非常に重要な要素になってくるのだということです。

さて、このリン・ホワイトJr.の議論あたりから出てきた、1970年代ぐらいのキリスト教に対する批判を大ざっぱにまとめると、大体こういうことだと見てもいいと思います。つまり、科学技術の暴走こそが、人類が直面している環境危機の原因だというわけです。ですから、科学技術（だけ）では問題は解決することができない。要するに、原因であるものを使って問題を解決することはできないということです。

ですから、問題は何かというと、こうした問題になるような科学技術の背景には西洋文明というものがあるということです。さらに、その西洋文明の中でも何が問題となる要素かというと、より根本的な原因は、自然あるいは世界に対する人間の傲慢な態度なのだということです。つまり、自分たちが好き勝手に使ったり造り替えたりしてもいいものだという態度があるのが問題になるわけです。これを、例えば環境倫理学などでは「人間中心主義」と言います。

リン・ホワイトJr.は、そうした人間中心主義的な態度をもたらしたのは、キリスト教の教えの一部だと言ったわけです。

彼の議論の構造は、このようになっています。ですので、根本的に問題を解決するならば、ここのところを何とかしなければいけない。われわれの世界とか自然に対する態度を変えなければいけないと言ったわけです。

しかし、もちろん、先ほどもリン・ホワイトJr.の言ったことをそのまま受け取っている人はいないと言いましたが、彼に対する批判は、さまざまなポイントで出されてきました。

第一に、環境破壊というのは、キリスト教の信奉者が多いような場所だけで起こっていたのではありません。もちろん、このことについてはリン・ホワイトJr.も自分の論文の中で少し触れているわけですが、完全に批判に対して答えられているわけではありません。

第二に、先ほどリン・ホワイトJr.の引用を見てもらいましたが、例えば聖フランシスコが、キリスト教の中の主流派の考え方ではないにしろ、そういう、少し違う考え方をとっていたということは、キリスト教の側からも指摘されています。ここでは神秘主義ですね。シュヴァイツァー（Albert Schweitzer）の「生命の畏敬」の思想などが、その例の１つとして挙げられています。

第三に、先ほどのご発表でも出てきたスチュワードシップ思想、信託管理人思想です。先ほどの吉川先生のご発表の引用部分と重なっていると思いますが、少し確認したいと思います。

あと、私の発表のハンドアウトは、吉川先生が翻訳された『ラウダート・シ』の日本語訳の、今日の話に関連する部分の抜粋になっていますので、お手元で見ていただければ、見やすいかもしれません。長いので全てを読むことはいたしませんが、色が付いているところを中心にざっと見ていただければ良いかと思います。

上からいくと、「神とのかかわり、隣人とのかかわり、大地とのかかわりによって人間の生が成り立っている」のだと。「聖書によれば、いのちにかかわるこれら三つのかかわりは、外面的にも、私たちの内側でも、引き裂かれてしまいました。この断裂が罪です」ということです。

先ほど「人間の傲慢さ」というキーワードが出てきましたが、それが述べられていたのはこのあたりです。「私たちがずうずうしくも神に取って代わり、造られたものとしての限界を認めるのを拒むことで、創造主と人類と全被造界の間の調和が乱されました。このことによって、私たちに付与された、地を『従わせ』、『そこを耕し、守る』という統治の任」……これはまさに先ほどのご発表でも出てきた「信託管理人思想」あるいは「スチュワードシップ思想」と言われている部分です。

この66段落の最後でも、アッシジの聖フランシスコへの言及がなされています。「アッシジの聖フランシスコがすべての被造物とともにあって経験した調和は、そうした断裂のいやしとして理解されたのです」と述べています。キリスト教の中にも、こうした断裂をもたらすような考え方とは違う要素は、確かに存在していたわけです。

そして、次の67段落を見てください。「次のような告発に対する答えを可能にしてくれます」と述べられています。これはまさにリン・ホワイトJr.の批判と似たような告発です。「すなわち、ユダヤ・キリスト教の教えが、大地への『支配権』を人間に付与する創世記の記事に基づいて、人間の本性を暴君的で破壊的なものとして描くことで、自然に対する無制限な搾取を助長してきたという告発に対してです」。先ほどの吉川先生のご発表の中でも強調されていましたが、これは聖書の正しい解釈ではないというわけです。このようにキリスト教側からは、リリン・ホワイトJr.のよ

うな批判に対して答えてきたわけです。

「聖書が世界という園を『耕し守る』よう告げていることを念頭に置いたうえで、その本文を文脈に沿い適切な解釈法をもって読まなければなりません。人間と自然との間には互恵的責任というかかわりが存在するとの含みがそこにはあります。各共同体は、生存に必要なものならなんでも大地の恵みからいただくことができますが、大地を保護し、その豊饒さを将来世代のために確保する義務を有してもいます」。

要するに、われわれ人間というのは、自然に対して好き勝手なことをやっていいという免状を与えられているわけではなくて、ちゃんと管理する義務を負っている存在なのだと、ここでは反論されているわけです。これが、いわゆるスチュワードシップ思想というものです。

さて、こうした形で、リン・ホワイトJr.の議論や主張をそのまま受け取ることができないということは大体明らかだと思います。それでも、彼の言っていることには全て価値がなかったのかというと、そのように受け止められているわけではありません。

彼は現在、特にこういう点で評価されています。人間が持っている世界観や価値観や態度といった心理的な要素……信仰というのもまさに広い意味でこうしたものの一つに含まれるわけですが、そうした人間の心理的な要因が、環境問題の解決にとって重要であることを指摘したわけです。その点は高く評価されています。

例えば現在、保全心理学ですとか、あるいは「持続可能性のための心理学」と呼ばれる心理学の分野が存在しています。そうした分野では、心理的な要因と持続可能性の問題との関連を指摘したという意味で、リン・ホワイトJr.は自分たちの学問領域の重要な先駆者の一人だと位置付けられていることがあります。

ここで注意してもらいたいのは何かというと、「Psychology "*for*" sustainability」、日本語で訳すと「持続可能性『のための』心理学」と付けられているということです。これは何を意味しているのかというと、こういう心理学の分野では、持続可能性という問題を解決する実践的な取り組みのために、心理的な要因についての知識をどのように生かすことができるのかという、問題解決的な視点が重視されているという特徴があります。

次に見ていただきたいのが、環境問題解決に関わるような心理的要因としてどう

いうものがあるのかということです。ざっと見てみてください。

例えば、知識というのも、私たちの心の中にあるものです。何を知っているかです。例えば、「2015年現在、世界の９人に１人が飢餓に苦しんでいる」というファクトです。これはわれわれの心の中にある、少なくともこのことを知っていた人の心の中にある事実ですし、今私が言ったので、皆さんの心の中にもこの事実があると思います。

でも、私たちが環境問題に関わるところでの心理的な要因というのは、こういう知識だけではなくて、価値観、何を重要とみなすのかということがあります。例えば、「世界のどこに住む人々であるかに関係なく、人々の苦しみは癒やされるべき」という価値観ですとか、信念、何を信じているか。例えば、「飢餓に苦しんでいる人々を救うために先進国の人々は協力することができるはずだ」というのが信念です。こうしたものも、われわれの心理的な要素であるわけです。例えば、信仰というのは、こうした価値観や信念に非常に近い部分があるわけです。

そして、もう一つ非常に重要なのは、動機、モチベーションです。私たちを実際に何らかの問題解決などへ突き動かすような動機というものが非常に重要になってきます。例えば大学の授業なんかで環境問題についての授業をしますよね。これは当然、知識を教授しているわけです。例えば、学生に対して「2015年現在、世界の９人に１人が飢餓に苦しんでいる」と事実を伝えただけで、じゃあ、自分はそのために何ができるかとか、何かをしたいと、学生は必ずしも思うわけではありません。これをテストで、ちゃんとこのことを覚えていて、世界で飢餓に苦しんでいる人が９人に１人だという事実を書けたとしても、それは必ずしも動機づけが伴っているわけではありません。

ですので、先ほど出てきたような実践的な問題解決という観点から考えた場合、この動機づけ、どうすれば人々が環境問題の解決に向けて動くのか、そういう説得だとか、人々を突き動かすようなメッセージというものをどのように与えることができるのかという問題が非常に重要になってくるわけです。

あと、小さいものとしては、成功の見込みに対する楽観性の度合いです。例えば、私たちは自分の家だけでエアコンを、例えば冷房の温度を28度に設定したといっても、世界全体のエネルギー消費の節約には、ほとんど貢献しないわけです。要する

に、自分がやっても問題解決には何もつながらないと信じていると、持続可能性に貢献するような行動ができないわけです。自分たちが何かをやれば、ちゃんと効果があって、この問題は解決できるのだというような、ある種の楽観性みたいなものがないと、われわれは実際の問題解決に取り組み続けることはできないわけです。

持続可能性に関連するような心理学の分野では、こうした心理的要因というのが研究されています。

このモチベーション、あるいは信念、価値観については、『ラウダート・シ』の中でも繰り返しその重要性が強調されています。例えば、14段落の途中から見ていただきたいと思います。

「残念ながら、環境危機の具体的解決を探る取り組みは、強力な抵抗によるだけでなく、より一般的な無関心――要するに動機づけのなさ、あるいは、そのことに対して価値観を置かないような態度をここでは指しています――に見られる関心の欠如によっても、その多くが挫かれました。妨害的な態度は、信仰者たちの中にさえ存在し、問題の否定から、無関心、冷ややかな諦め、技術的解決への盲信にまで及んでいます。私たちは新しい普遍的な連帯を必要としています」ということです。

続けて、216というところを見てください。ここで言われているのは、先ほどのご講演でもキーワードとしていくつか出てきた用語、例えば「エコロジカルな霊性」と言われているようなものも、われわれの心理的な在り方の一つであるわけです。

大きな構図で言うと、こういう話になります。もし仮に、それが必ずしもキリスト教によってインスパイアされたものであるかどうかは別として、自然や世界に対するわれわれの傲慢な態度というものが環境破壊を引き起こしているのだとすると、われわれの態度や心理的な在り方が持続可能性に適合しているような、今までとは異なる新しい在り方に変わらなければいけないわけです。

『ラウダート・シ』の中で強調されているのは、そうした今までとは違う心の在り方、あるいは態度の在り方の転換について、キリスト教的な観点、キリスト教的なアイデアから語っているということです。そして、読む人たちに向けて、それを呼び掛けている文章であると思います。

２段落目から読みます。

「福音の教えは私たちの考え方、感じ方、生き方に直接影響を与えるため、ここで私は、キリスト者に対して、信仰の核心に根ざすエコロジカルな霊性のためのいくつかの提案をしたく思います」。

「理念やその概念ばかりでなく」、要するに知識だけではなくて、「そのような霊性が、世界を守ろうとする私たちの意欲をいかに駆り立ててくれるか」、つまり動機づけといったものに、「私は関心があるのです」と言っているわけです。「私たちを鼓舞する霊性なしに、『個人や共同体の行動を、刺激し、動機づけ、励まし、意味づける、内的原動力』」、そうした心理的な要因なしに、「この高邁なことへの貢献を、ただ教義だけでは持続させることはできません」というわけです。

続けて、短い引用を２つ見ていただきたいと思います。段落15と段落９です。

段落15では、動機づけだとか環境教育に関わるような、そうしたものの変革がなければいけないということが書かれています。

段落９を少し読みます。「同時にヴァルソロメオス総主教は、環境問題の倫理的及び霊的な根本原因への注意をも促しました。それには、技術による解決だけではなく」――技術だけでは、この問題は解決できないのだということです。「人間性の転換による解決が求められます」ということです。

当然『ラウダート・シ』、あるいは今までの環境問題に対するキリスト教の立場からの発信というのは、この人間性の転換を宗教的な観点から呼び掛けるものでした。それに対して、私が専門としている環境倫理学は、世俗的な哲学の観点から、こうした人間性の転換の可能性を探る学問であると説明できるかと思います。

技術的な解決だけでは「単なる対症療法を施しているに過ぎず」、問題の根本的な解決には至らないのだということです。

私が国際教養学部で2017年度から担当することになっている、サステイナビリティ・スタディーズでの教育も、環境についての事実、環境に関連する技術についての知識を与えるだけでは、おそらく教育としては不十分だろうと思います。持続可能性の「ための」教育を考えれば、そのような教育だけでは不十分であって、われわれを突き動かすようなもの、われわれを動機づけるようなものを組み込んだ教育というものが、おそらく必要になるわけです。ですので、ここではちょっとキャッチフレーズ風に書きましたが、

「持続可能性に貢献するための教育（education for sustainability）」ということを、やはり真剣に考えなければならないだろうと思います。

実際、このような考え方は、環境教育の分野でも既に昔から言われています。環境教育の専門家であるデイヴィッド・オア（David Orr）という人が、「サステイナビリティの 4 つの挑戦（Four Challenges of Sustainability）」という論文を書いています。

彼はこのように言うわけです。「真の持続可能性は、別の言い方をすれば、表面的な変化からではなく、人類が完全な姿へと成長するのと似た、より深いプロセスから生じるのである」ということです。全人的な発展ということは、先ほどの吉川先生のご発表の中でも出てきましたが、ここでまさに同じことを言っているわけです。

次の段落を読みます。「持続可能性への恩寵に満ちた移行への障害となるのは、技術的なものというよりも、社会的、政治的、そして心理的なものである」。

「世俗的な文化内の科学者たちはしばしば精神に関わる事柄に不安を覚える。だが、科学それ自体は持続可能な人類を支持するような理由を与えることはできない」。われわれに持続可能性に関する動機づけを与えてはくれないのだということです。

もちろん、非常に宗教的な言葉遣いをしていますが、オア自身は、そこまで特定の信仰に基づいて議論しているわけではありません。しかし、彼自身の言っていることは明らかに、非常に広い、あるいは緩やかな意味での宗教的なものがなければ、持続可能性への移行というのはあり得ないということです。

ちょっと読みますと、「持続可能性への移行は『神秘、科学、生命、そして死に敬意を払う、より高次のアウェアネス』に基づかなければならない」のだということです。われわれの心の中のありようが変わらなければいけないということです。

既にお話しさせていただいた中でも何度か触れましたが、『ラウダート・シ』の中でも同じような問題や関心が繰り返し述べられています。「全人的な発展」ですとか「エコロジカルな回心」というような言葉遣いが、この文章の中に繰り返し出てくるわけです。その他にも、例えば88段落などでは「エコロジカルな諸徳」、「virtue」への言及があります。

近年の環境倫理学の中に、環境徳倫理学（environmental virtue ethics）という領域があります。この場合の徳とは何かというと、適切な振る舞い、特に環境的な文脈では、当然、持続可能性に貢献するような振る舞いへの動機づけや傾向性を伴った態度を指します。

徳があるということはどういうことかというと、単に、あることについて知識を持っているとか、「これはこうだと思う」という信念を持っているだけではなくて、それに対して何か適切な行動をとることができるということです。例えば、持続可能性に関連するような環境的な徳を身に付けている人物というのは、持続可能性はわれわれにとって非常に大きな問題であると思っているだけではなくて、ちゃんとそれに向けた何らかの動機づけを自然に持っているような人物であるということになるわけです。

ここで言われているような環境的な徳というのは、環境破壊をもたらした、かつての人間の態度と対比させて、全人的な発展の結果として獲得されるべき態度と理解することもできるように思います。

『ラウダート・シ』は、さまざまな論点を扱っていますので、全ての論点をこの短い時間で扱うことはできません。ですので、今回の報告で扱うポイントは以上のものだけに絞らせていただきたいと思うのですが、では環境倫理学の立場から見てこういう議論はどのように理解できるのか。あるいは、『ラウダート・シ』と似たような議論が現在の環境倫理学の中でどのように展開されているのかということを、最後に確認したいと思います。

まず、アルド・レオポルド（Aldo Leopold）という保全生物学者がいます。彼をどのように説明するかは非常に難しいわけですが、よく知られた「土地倫理」という文章を彼は 1949年に書いています。

その中で彼が言っている非常に重要な部分がここです。「われわれが知的に重点を置く対象や誠実さ、愛情、信念における内面的な変化が起きないことには、倫理観の重大な変化が起こったためしはない」というわけです。これは心理的な要因が倫理と関わらなければいけないという考えを示しています。

「自然保護がまだ、人間の行動の根底に触れていないことは、哲学や宗教が未だこの問題を扱ったためしがない何よりの証拠だ」と。環境倫理学という学問が登場

してくるのは大体1970年代ですので、この文章は、まだあまり倫理学や哲学が、それこそ真剣に環境問題を扱っていない時点で書かれています。「自然保護をやさしいものにしようとしたばかりに、矮小化してしまった」ともレオポルドは指摘しています。

あるいは、現在の環境保護運動に非常に大きな影響を与えているアルネ・ネス（Arne Næss）という人の「ディープ・エコロジー」という立場があります。アルネ・ネスは、ディープ・エコロジーについて、「ディープ・エコロジー運動を支持する人たちの目標は現代社会を少しばかり改革することではなくて、私たちの文明全体の実質的な再出発である」と述べています。要するに、今までの人間の自然だとか世界に対する関係の在り方を大きく変えなければいけないと、彼もまた言っているわけです。

では、環境倫理学からのコメントです。

私のように人間中心主義に批判的なところがある環境倫理学者は、必ずしもキリスト教を信仰していなくても『ラウダート・シ』の主張を理解し、多くの部分に共感を覚えることができます。

それは何かというと、先ほど見ていただいたような、例えばレオポルドだとか、あるいはネスのような、環境倫理学周辺の思想家たちが述べていることと並行したような内容がそこに含まれているからです。先ほども少し言いましたが、環境倫理学は同じようなことを神様抜きに、要するに世俗的に言おうとしてきた学問だと考えてもらってもいいかと思います。言い替えますと、3つのかかわりというお話が先ほどありましたが、そのうちの「神とのかかわり」抜きで、自分自身あるいは自分以外の人を含めた「人間とのかかわり」と「自然とのかかわり」の両方を、説得力を持って説明できるかどうかということです。これが環境倫理学にとっての課題だったわけです。

ネスは、実は少し特殊な立場で、哲学的であるわけですが、同時に神秘主義的でもあります。そのため彼の議論では、こうした部分というのは、かなり説明しやすい立場になっているわけですが、もっと普通の、世俗的な環境倫理学者にとっては、こうした課題というのは非常に大きな課題として出てくるわけです。

「人間とのかかわり」という部分に関しては、「人間の尊厳」概念が世俗的にも

かなり広く影響力を持つようになってきていますので、何とか説明することはできるように思います。ただし、「自然とのかかわり」について、これは公平に述べるとするならば、今まで環境倫理学者が本当の意味で成功してきたとは、たぶん言えないだろうというのが正直なところです。これは、これからの課題も含んでいるわけです。

では、その原因は何なのかというと、これはハーマン・デイリー（Herman E. Daly）という環境経済学者の文章なのですが、これも少し見てください。

「持続可能な発展には、回心…と世界観の刷新と…少しばかりの健全な悔悛…が必要だろう。これらはすべて宗教的な用語だが、それは偶然の一致ではない。というのは、われわれがそれに即して生活している根本的原理の変化は、非常に深いところに及ぶ変化であり、その結果、われわれがそれをどう呼ぼうと、それは本質的に宗教的だからだ」とデイリーは述べています。

環境倫理学者なんかは世俗的な観点からこうした変化を説明しようとしているわけですが、しかし、そうした努力も、本質的にはどこか宗教的な要素を含まざるを得ないのであって、それを排除した形で説明するというのはきわめて困難です。

例えば『ラウダート・シ』も、世界の人々に語りかけるという形で始まっているわけですが、途中でそれが断念されて、主にキリスト者に対して語りかけられるという形になっていることからも、その難しさというのを理解していただけるかもしれません。

例えば、私自身の実際的な関心で言うと、世俗的な形で行われるような、大学における授業を通じてこのような態度の変化を起こすということは果たして可能なのかどうかということです。

これは私の考えですが、途中で述べたことと少し反するようでありますが、次のように考えたいと思います。知識だけでは信念や価値や動機が変容するとは限らない。これはそのとおりですが、でも、やはり知ることによって、われわれの態度が影響を受けることもあるというのも確かであるわけです。やはり知ることは大事なのです。

その意味で、持続可能性のための包括的な情報を含んだ、動機づけに満ちたメッセージである『ラウダート・シ』が世界に公開され、それだけではなく、読みやすい日本語にも翻訳されて、必ずしもキリスト教徒ではないような読者もアクセスでき

るようになったということには非常に大きな意義があるのではないでしょうか。

　最後に、翻訳に携わられました吉川先生に感謝を申し上げて、私の発表を終わらせていただきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

（拍手）

【司会（篭橋）】 神崎先生、どうもありがとうございました。

第三報告

回勅を神学的に読むか、哲学的に読むか？

佐藤 啓介
（南山大学人文学部キリスト教学科 准教授）

【司会（篭橋）】　最後の第三報告として、宗教哲学がご専門の、南山大学人文学部キリスト教学科准教授の佐藤啓介先生にご登壇頂きます。『ラウダート・シ』は宗教哲学の立場からはどのように読むことができるかという点を中心に、ご講演頂きます。それでは佐藤先生、よろしくお願いします。

南山大学人文学部キリスト教学科の佐藤と申します。

私は、環境思想とか環境倫理が専門ではなくて、宗教について哲学的に考える宗教哲学という分野を研究しております。ですので、先のお二方みたいに環境教育や環境倫理のプロフェッショナルというわけではないので、ここで何かしゃべってと依頼されたときに、さて何をしゃべろうかとすごく悩んだのですが、あくまで宗教哲学者として、この回勅をどのように位置付けるかというようなことを考えてみたいと思っています。

と申しますのも、先ほどの神崎先生の話にちょうどつながるようなことなのですが、宗教が社会全体に向けて倫理的なメッセージを発すると、しばしば大きなジレンマに陥ることがあります。どういうことかと申しますと、例えば、仏教の立場からある問題に対して「仏教ではこう考えます」という倫理を発したとき、「なるほど。仏教でそのようなこと

が考えられるのは分かりました。でも、私たちは仏教徒じゃないからね」といって、あまり聞いてもらえないことがあります。

かといって、じゃあ、今度は、そうしたメッセージが届かないので、できるだけ宗教色を弱めて倫理を説くとどうなるかというと、「ああ、なるほど。仏教とかキリスト教でも世俗的な倫理と同じようなことが説かれているんですね。よく分かりました。でも、それなら、別に仏教とかキリスト教の倫理をことさら説かなくてもいいんじゃないですか」ということになる。

先ほどの神崎先生のお話の中でまさにありましたが、環境倫理の場合で言うならば、「神抜きで心理的動機づけができるのであれば、別にそれでいいんじゃないですか」ということで、宗教色を強めた倫理を発すれば、いまいち聞いてもらえない。かといって宗教色を弱めれば、「別になくてもいいんじゃないですか。世俗的倫理でいいんじゃないですか」というような、ある種のジレンマがあるように、私には思われます。

結局のところ、その結果、多くの宗教内部の人たちは、世間的な発言力を示すために社会的メッセージは発しつつも、主に自集団内部での教化を目指したり、あるいは、他の宗教に向けて、宗教間の対話の中で宗教倫理を説いたりすることに傾注しがちです。あるいは、この分野だったら聞いてもらえるかなというような、得意分野についてのみ宗教倫理を説くという傾向が全般的にあるように、私には思われます。

私は、キリスト教学科に所属はしていますが、クリスチャンではない教員です。ちょっとレアなのですが、あくまで宗教哲学者として普段は振る舞っているのですが、もしそういう観点で『ラウダート・シ』を考えた場合、やはり今お話ししたようなジレンマに陥ってしまうのだろうかということを考えてみたいと思います。

確かに、『ラウダート・シ』という、この回勅は非常に影響力があることは認めますし、カトリックの信徒が世界中に何億といる中において、この回勅のメッセージは非常にインパクトがあることは私も認めますが、問題は、先ほど神崎先生がおっしゃられたように、環境倫理でもまあまあ、神抜きの部分は非常に穏当な内容だとするならば、「別に『ラウダート・シ』でなくてもいいんじゃない？」というような声が出てきてしまうかもしれません。

かといって、キリスト教的な部分を強調すればするほど、カトリックの人々にとっては

非常にインパクトがあっても、一般の人々にとっては、やや近寄りがたい文書となってしまうかもしれません。こういうジレンマに陥ってしまうのではないかと思います。これで良いのだろうかというようなことが、私の今日の問題意識です。果たして本当にそのようなことになるのだろうかということです。

ちょっと大きな話をしますと、この『ラウダート・シ』についてのシンポジウムを南山大学と上智大学の合同のシンポジウムでやることの意義自体にも関わってくると思うのですが、なるほど４年制大学としては、日本でカトリック大学である南山と上智、この２つの大学がやるからこそ、カトリック的倫理を取り上げようというのはすごく良く分かります。

でも一方において、日本列島という、クリスチャンの人口が１％程度の国において、カトリック的倫理を取り上げることの意味は何なのだろうか。たまたま２大学がカトリックだからという理由でしかないのだろうか。それだけで良いわけではないだろうと私は思うわけです。

そういうわけで、『ラウダート・シ』という回勅を、ちょうど先ほど吉川先生、神崎先生がさまざまな内容の紹介や環境倫理的評価などをちゃんとしてくださったので、その上で、宗教学者はこう読むのだということをお話ししたいと思います。そして、先に結論だけ申し上げると、現代の宗教学の観点から見ても、この回勅『ラウダート・シ』は新しい、非常に大事なスタンスを示しているということを論じていきたいと思っております。

『ラウダート・シ』の通史的特徴
―― 回勅の連続性から考える

まずは、そういう大きな話をする前に、先にこの『ラウダート・シ』という回勅がカトリック内部においても、新しい側面と昔からの伝統を引き継いできた側面があるということを簡単に説明しておきたいと思います。

これはもう先ほど吉川先生がきちんとご紹介してくださって、逆に私が付け加えるほどのことではないのですが、環境問題について歴代の教皇が言及すること自体は特に珍しい、新しいことではありません。

また、『ラウダート・シ』の中では、先ほどの吉川先生の話の中にもありましたが、環境、経済、社会の３つのジャンルから多岐にわたって議論されていて、経済、特に最近はグローバルな経済の諸問題についても、古くからというか2000年代以降は特に、教皇文書などでは言及がなされてきました。

ただ、ここ20～30年ぐらいの中で、環境問題やグローバル経済の主題の扱われ方というのは、①教皇文書などでは、個々のテーマは取り上げられるのだけれど、それら３つが有機的に結び付いていません。環境は環境、経済は経済、政治は政治というように、バラバラになっているような扱われ方をすることが多かったです。また、②あくまで自然であるとか自然科学のようなテーマの一つとして、環境というテーマが取り上げられる傾向がありました。そして、これは仕方がないのですが、③環境問題に関して、いささか消極的で抽象的な「方向づけ」、あるいは、先ほどの神崎先生の言葉を使えば「動機づけ」と、「原則」を提示するにとどまっているような傾向がございました。

これに対し『ラウダート・シ』という回勅は、「インテグラルなエコロジー」という名称の下で、この①～③の問題を乗り越えているという点で、まずカトリック内部の中でも非常に新しさがあります。そこにウエイトやポイント、インパクトがあるということは、いくら強調しても、しすぎることはないと思います。

いくつか引用がありますが、引用を全部読んでも切りがないので、適当に飛ばしながらいきます。

最初の引用ぐらい読んでおきましょうか。この回勅の基本的な課題です。「皆がともに暮らす家を保護するという切迫した課題は、人類家族全体を一つにし、持続可能で全人的（integral）な発展を追求するという関心を含意しています」（13節）といった問題について書かれています。ここに、この回勅の新しさがあります。

実際、これまで教皇がどのように社会的な回勅、社会的な問題について書かれた回勅を発してきたか、また、それに関連する、どのようなカトリック文書の歴史があるかということを簡単に、ざっと挙げておきましたが、先ほどの吉川先生の話ともかぶるところもあるので、パパパッと見ていきたいと思います。

19世紀のレオ 13世の回勅『レールム・ノヴァルム』（1891年）や、それから半世紀以上後のパウロ6世の回勅『ポプロールム・プログレシオ』（1967年）という２つ

の回勅があり、それらをふまえ、1987年にヨハネ・パウロ２世が、「開発」という広いテーマで、真の開発とは何ぞやと問い、その条件を考える回勅『真の開発とは』を出しています。その中で環境について触れられてはいるのですが、まだここでは全50節のうち１個の節でのみ環境倫理に関するテーマが挙げられているにとどまっておりました。これは、1992年のリオ会議以前という時代性も当然踏まえなければいけません。

その後、1991年の『新しい課題』という回勅の中では、ヒューマンエコロジーとソーシャルエコロジーという概念の下で、土地や自然、労働が搾取的に利用されない経済体制について考察されています。『ラウダート・シ』の方向性、「インテグラルなエコロジー」という方向性自体は、既にこの時点において芽生えていたとも言えるかもしれません。

ただ、これに関して言えば、示されていることはやや消極的で、「教会は提示すべきモデルを持ち合わせていません」と言っています。「ない」なんて、ちょっと消極的な文章を綴った後に、最後の１行で「教会はその社会的教えを、一つの不可欠で理想的な方向づけとして提示します」（43節）と言うにとどまっておりました。

その後、回勅ではないのですが、教皇庁が出した『人間の尊厳と科学技術』（2004年）という重要な報告書の中で、人間は神の像として造られていて、うんぬんといった中で、被造物、つまり自然の世界に対して、人間は３つぐらい責任がありますよということを示しています。先ほどのスチュワードシップという概念です。

１つ目は、宇宙を科学的に正しく理解する、宇宙を解明するという責任。２つ目に、自然界に対して、動物とかの存在を含めて、配慮を持つ責任がありますよというお話。これが環境倫理です。そして、３つ目に、自然界の生物学的統合を守る。これはむしろ生命倫理の話です。この３つが大事な課題として、管理責任としてありますよというような文書が出されておりました。

『人間の尊厳と科学技術』では、科学論・環境倫理・生命倫理という３つの分野の中で環境倫理が出てきます。もともとギリシャ語で「家」を表す「オイコス」から「エコロジー」という言葉が生まれます。オイコスにはもう１つ「家計」という意味があるのですが、この文書では「オイコス」というテーマに触れながらも、経済の話と結び付いていません。典型的に環境倫理だけ、バラで扱われていました。

その後、2009年のベネディクト16世の回勅『真理に根ざした愛』。これなども、やはり『ラウダート・シ』につながるような、「インテグラルなエコロジー」を志向する芽生えのようなものを既にこの回勅の中で読みとることができます。特にこの回勅では、グローバリゼーションについての問題意識が非常に顕著です。

少しだけ読んでおきます。「すべての人の全人的発展」をキーワードに、人権、経済、グローバリゼーション、文化的アイデンティティ、移民などのさまざまな領域が広く扱われながら、次のように記されています。「グローバル化が進行する世界にある教会にとって、真理に根ざした愛は取り組むべき重大な課題です。……理性と信仰に照らされた愛に根ざしてのみ、より人道的で、人間らしさの回復により役立つ発展目標の追求は可能になります」（9節）。このような形で、まさに『ラウダート・シ』の予告とも位置付けられるような方向性が示されています。

また、二つの文書の中で扱われている課題の共通点は多いです。この『真理に根ざした愛』という 2009年の回勅が「すべての人の全人的発展」という、「人間」という側に中心軸を置いていたのに対し、『ラウダート・シ』では、むしろ人々が「ともに暮らす家」、地球ですね。「家」の側に統合の鍵を置いています。そういう点では、ウエイト、着目点の違いがあります。

さて、ここまでは常識的な考察です。私の話は、むしろここからが本題です。

私のような、信仰を持たない、世俗的で宗教学者的な目から見たとき、『ラウダート・シ』には、さらにもう１つ、見逃せない特徴があると思っています。それは、先ほどの神崎先生のお話でもあったのですが、『ラウダート・シ』が誰に向けて書かれているかというところです。確かにこの『ラウダート・シ』は信仰を共にするカトリック世界に向けて書かれている回勅であることは否定できませんが、同時に、信仰を共有しない人に対して明確な意識が示されているという点も見逃せません。

当たり前なのですが、地球上に住んでいる、「地球」という家全体がテーマになっている以上、カトリックの中だけで環境問題を解決してもしようがないんです。やはり、この地球、みんなで住んでいる家というものを考える以上は、全人類へ向けた一つのメッセージの側面も非常に強く出ています。

そのような意識が特に表れているのは、「ここから先はキリスト教特有の話をします

よ」というような、「キリスト教の自然理解について創造論を使って話しますよ」というチャプター「第2章　創造の福音」があるのですが、その中の前書きで、次のように書いています。

「善意あるすべての人にあてて認められたこの文書が、一章を割いて、信仰者たちの確信を取り上げるのはなぜでしょうか」（62節）。要するに、「全人類に向けて書いている文書なのに、なぜいちいちキリスト教のことを書くのか疑問を持つかもしれないけれど、まあ、読んでね」というようなことを言っているわけです。こういう部分などに、教皇フランシスコの意識が非常にはっきり出ています。

「この回勅は、喜んですべての人と対話しながら、ともに解放への道筋を探る」（64節）のだと。まずもってはキリスト者たちに「自然というのは、このような形で理解してね。その動機が大事だよ」ということを言うのですが、その一方で「喜んですべての人と対話する」ことを目指しているというような形で、明らかにキリスト教外部、外に向けたメッセージという意識がここに読み取れると思います。

そういう意味でも、2009年にベネディクト16世が書いた、「真理に根ざす」ということにウエイトを置いた『真理に根ざした愛』という回勅との違いがここに1つ見られるのではないかと、私には思われます。つまり、「真理」という概念を用いて、それを伝道するということよりも、『ラウダート・シ』はむしろ対話の側にウエイトを置いた回勅であるということが読み取れます。

さらに読んでみます。「広く意見の一致を見ることは難しい環境問題があるけれど、ここで私が繰り返し申し述べたいのは、教会は、科学的な問題を解決したり、政治家の代わりを務めたりすることが自分の任務ではない」と（188節）。これはもう昔から、しばしば教皇庁の文書で言われています。「私はただ、個々の利害関心やイデオロギーによって共通善が損なわれないようにするための、正直で公明正大な討論を奨励しようと気をもんでいる」（同）のだということです。

「私たちの星に暮らす人々の大半は、自らを信仰者であると公言しています。このことは、自然を保護し、貧しい人々を守り、敬意と友愛のネットワークを造るために対話をするよう宗教を駆り立てるはずです」（201節）ということです。ですから、この回勅をあくまでカトリック世界だけに向けたものと理解することは、まずは教皇の意図に反する

と私は思っています。

『ラウダート・シ』の同時代性
――「ポスト世俗化」論の地平に置きなおす

さて、とりあえずこの回勅が持つ、これまで出された回勅との連続性の中での新しさについて簡単に説明してきました。その上で、今度はこの回勅をカトリック内部での議論から外して、現代における宗教というものをめぐる議論の中に置いてみると、むしろそうすることでこの回勅の新しさが見えてくるというお話をしたいと思います。

近年、宗教というものを議論する際に、その宗教と公共性というテーマでよく議論になることがあります。そして、そういうことを意識すると、この回勅が決して突飛なものでもないし、むしろ非常に先端的なものであることが示せます。

先に小難しい言い方だけしてしまうと、「ポスト世俗化」時代における「公共宗教」という、現代宗教論が提示するパースペクティブからすると、『ラウダート・シ』は、その流れのど真ん中にいるというのが、ここで示したいことです。

一体どういうことなのか。私個人の感覚だけではないと思うのですが、宗教がそもそも社会の中で、社会問題、公共的な問題にあれこれ口を出してくるというのは、結構、伝統的に毛嫌いされてきたと私には思えます。

冒頭にお話ししたことですが、その宗教を信じている人の立場の話を社会全体に向けても仕方がないじゃないかというような感覚は、正直、多くの人が持っているのではないでしょうか。とりわけこの日本においては、そうではないかと思います。実際、そのような感覚というのは日本に限った話ではなくて、20世紀中ごろまでの宗教内部、信仰している人たちとしても、宗教学者たちも、一般人にとっても、そのような意識は広くありました。

なぜかというと、伝統的に、19世紀から20世紀にかけては、宗教というものは社会の中でその影響力が弱まり、そして、社会は宗教の影響力が抜けて「世俗化」し、マックス・ウェーバーの言葉では「脱魔術化」してきたということがあったからです。つまり、宗教という枠組みから自由になったのが近代主義社会だということです。

その結果、宗教というものの居場所は人々の心の中の信仰の出来事であって、皆、家でいくらでも好きに、個人の中ではいくらでも好きに祈ってくださいと。それはプライベートなことであり、保障されていますと。ただ、公共的な場面で宗教の名の下に何かを語るのは、ちょっと待ってくれよというのが、伝統的な宗教学、社会学一般における宗教の位置付けでした。こういうものを私事化といいます。宗教がプライベートなものになっていったのが近代だということです。

そして、先ほども申し上げたように、宗教を公的な領域と関係付けて語るというのは、宗教内部の人たちですら、はばかられてきたというのが、20世紀中ごろまでの事情であり、現代ですらそういう傾向は、たぶんあると思います。

ところが20世紀後半あたりから、このような宗教理解は間違っていたのではないかということが、宗教学の内部で議論されるようになります。その中にも細かい議論があるのですが、例えば、イラン革命に代表される、その後、イスラム復興に代表されるような宗教復興とか、あるいは、アメリカによる宗教右派の台頭、あるいは南米における解放の神学、さまざまな中で、宗教はもっと社会的に活動しているじゃないかと。心の中で信じているだけのお話ではないじゃないかというようなことが徐々に気付かれ始めていきます。

そうした中で、これは1994年にカサノヴァという学者が提示した概念なのですが、「公共宗教（Public religion）」という在り方もあるよねという、非常に重要な著書が出され、宗教内部、そして外部においても、宗教はもっと公共的な存在としてあっていいのだという、宗教の公共性を語ることが許されるという風潮がつくられていきます。

例えば、すごく分かりやすく一例を挙げますと、日本のテレビのゴールデンタイムで「ぶっちゃけ寺」という番組が２年ぐらい前からやっていますが、あれはたぶん、今まではあり得なかったことです。今までは解説本が出ることはあっても、仏教をテーマにしたゴールデン番組が普通に行われて、仏教のありがたいお説教などが、普通に取り上げられています。これは今までなかったことだと思います。まさに「Public religion」の、非常に分かりやすい、卑近な現状の一つです。

そういう広い話を含めて、「Engaged Buddhism」という考え方など、さまざまな宗教はもっと社会貢献をしましょうみたいなことを言っています。

どういうことかというと、ここで言いたかったのは、宗教というのは、ただ単にプライベートな存在でもなければ、むしろ、もっと公共的な空間に存在するものであり、しかもそれは社会の中で倫理的・規範的な発言、つまり、生命倫理や環境倫理など、さまざまな倫理に対する発言権を有する一プレーヤーとしての役割が認められるべきなのだというように、現代社会における宗教の位置付けが変化しています。そのようなことが、日本ではまだ認められていないところもあると思いますが、ヨーロッパなどにおいては、こういう議論はもうスタンダートになりつつあります。

そういう中で、例えば分かりやすいものとして、哲学者のハーバーマスという人が、2000年代以降に宗教に対してかなり積極的に発言をしています。それ以前のハーバーマスは、宗教というものを全然語らなかったのですが、宗教をもっと語らなければいけないとハーバーマスは反省して、次のように言っています。

「宗教は、政治的公共圏においても、社会のもつ文化においても、個人的な生活態度においても重要性がなくなったということには必ずしもならない」ということです。「世俗化された社会の政治の分野でも、宗教組織が解釈共同体の役割を引き受けている度合いが高まっている」といったことを、ハーバーマスは述べています（ユルゲン・ハーバーマス「「ポスト世俗化」社会の意味するところ」『ああ、ヨーロッパ』pp. 110-111）。

そして、次が分かりやすいです。ハーバーマスは、「宗教は宗教で、もっと民主主義とか、いろいろ勉強しなきゃ駄目よ」と言った上で、「こうした学習プロセスが必要なのは宗教的伝統主義の側だけで、世俗主義の側には必要ないと言って済むのだろうか。世俗主義の立場から宗教を蔑視することもやめねばならないのではなかろうか。国家権力の宗教的中立と、宗教的発言を政治的公共圏から排除することは別である。そうである以上、世俗の側も、宗教的伝統主義の側の学習プロセスと相互補完的な同じ学習プロセスが必要なのではないだろうか」と述べています（同 p. 127. 強調原文）。

われわれは、特に私もそうですが、信仰していない立場の人間からすると、宗教というのはすごく特殊な存在であって、「あいつらが世俗のマナーを学べ」というような言葉が出てきましたが、われわれはわれわれで宗教のマナーを学ばなければいけないのではないかというようなことをハーバーマスは言っています。

つまり、われわれは、「世俗社会」という大きな領域の中に宗教という特殊な領域が包含されていて、「世俗社会の中でちんまりと宗教が存在していても許されるよ。ただし、公共圏の中に出てこないで個人の心の中で信じていてね」というように場所を与えられている、こういうイメージで宗教というものを捉えがちなのですが、そうではなくて、ハーバーマスの議論は、二つの並立する領域を想定し、片方の領域が信じていない集団、世俗集団だとすると、もう他方の領域が、キリスト教、仏教、イスラム教など、さまざまな宗教です。レベルが違う集団ではなくて、等しいレベルにいる集団として宗教というものをちゃんと位置付けなければいけない。世俗もまた諸宗教と同等の一領域として認識しなければならない。このような時代がやってきたのが20世紀末ぐらいからであり、これを「ポスト世俗化」と、宗教学の中では呼んでいます。もう世俗化の時代ではないということです。

だからこそ、われわれがさまざまな発言権をそれぞれ持っているのと同じように、宗教側にもちゃんと発言権を認めてやらないといけないし、そのような声を切り捨てることは伝統的な文化の資源を切り捨てることにつながると、ハーバーマスは言っています。

さて、ここで『ラウダート・シ』の話に戻します。ちょっと宗教学の話がズラズラと続きましたが、このような観点で見たときに、『ラウダート・シ』は、まさにこのポスト世俗化時代の宗教の在り方を非常に意識した回勅になっています。ここがポイントです。まさにハーバーマスが言っているようなことを、『ラウダート・シ』の中でフランシスコは言っているんです。実はハーバーマスは、前の教皇ベネディクト16世と対話していたのですが、おそらくそういう議論の影響もあると思います。

ちょっと見てみましょう。これはフランシスコが、『ラウダート・シ』の前に出した『使徒的勧告』という文書の中で書いている言葉です。「宗教的信念によって生まれたというだけで、それらの書物、宗教書を闇に葬ることは、分別ある賢明な行為でしょうか」（214節）と、「違うんじゃないですか」と問いかけています。もう１つの引用が分かりやすいです。次は『ラウダート・シ』からの引用です。「倫理原則を、いかなる文脈からも切り離された、抽象的なかたちにおいてのみ表せるものと考えるなら、それはあまりに単純すぎるでしょう。また」、ここが大事です、「倫理原則が宗教的言語で表現されているからといって、公の議論において価値を損ねるというわけでもありません。理性

で理解できる倫理原則は、いつも異なる装いで繰り返し姿を見せるもので、宗教的言語を含むさまざまな言い回しで表現されうるもの」（199節）だということです。

ですから、宗教的な言語で書かれているということが、即、世俗社会において読む価値がないというような見方そのものが、もはや時代に即していないということです。これが現代の宗教論の中の一つの理解であり、まさにフランシスコもそのような理解の上でこの回勅を出していると、私には読めます。

その意味で、やや言いすぎの表現を使いますが、『ラウダート・シ』はこの意味において、ポスト世俗化時代における「公共圏における一発言者としてのカトリック教会」ということです。

確かに、世界全体をトータルに、世界全体の真理は語っていないかもしれません。だけれど、一発言者ではあるということです。そのような意識の下でのカトリック教会の性格を持つ回勅だという理解をするならば、この回勅はまさにポスト世俗化という現代の宗教状況の中で書かれた、そしてまたそれにふさわしい回勅だと、私には感じられます。

もちろん、これは私がそのように解釈したというだけで、カトリックの方々には「お前、ちょっとそれは解釈しすぎだ」と、怒られてしまうかもしれません。第二バチカン公会議においては、そもそも世俗社会全体に対して「良心の教育」を行うことがカトリック教会の使命だという考え方があり、それは今も継承されています。ですから、一プレーヤー、一発言者に格下げするという発想は、おそらくないと思うのですが、ただ、このような解釈も宗教哲学的には可能だということは示しておきたいと思います。

世俗と宗教の間の回勅
―― 回勅の解釈学？

さて、その上で最初の話に戻りたいと思います。私の話の冒頭で「宗教的に語ると独自なので聞いてもらえない。かといって世俗的に語ると、平凡すぎて聞いてもらえない」というジレンマに陥るということを言いましたが、そもそもこのようなジレンマが生じるのは、世俗という一般空間の中に特殊な宗教があるという、伝統的な、今までの「世

俗化」の理解に基づくパラダイムの話です。だけれども、われわれは理解をあらためられているのであり、そのようなジレンマ自体が、ある意味では擬似問題だと考えたほうがいいかもしれません。

ただ、そうは言いつつも、また微妙なところなのですが、今言ったハーバーマスという人が、先ほども言ったように「宗教を一つの発言者として認めましょう」みたいなことを、「イスラム教、仏教、創価学会、いろいろな宗教の発言者がいるのが、こういう公共圏だよ」と言うのですが、だけれど、ハーバーマスという人も、じゃあ、全面的に宗教を、世俗と並ぶ発言者として認められるかというと、そういうわけではありません。でも、みんなが、語っていることはお互いに議論できないとしょうがないよねということです。

ですから、ハーバーマスという人は、言ってみれば、無信仰集団の領域と信仰集団の領域という、等しく相並ぶ二つの領域を想定しつつも、その両者全体を包み込む仕方で、もう少し広い意味での世俗社会ないし公共圏というのを想定し、無信仰集団も信仰集団も、ともに議論できる形でその世俗社会に参加してくれないと困ると言っているわけです。そういう意味では、あくまでもお互いの中で翻訳可能な仕方で、つまり理解できる形で語ってくれないと困るというわけです。そうでないと、さすがに公共圏からその宗教を締め出さざるを得ない場合もあるかもしれないと語っています。

これに対して、チャールズ・テイラーという人は、そんな広い意味での議論が通じ合う世俗社会なんていうものを想定することが間違いだと言っています。自分自身の文化的あるいは精神的な源泉に基づいてお互いが倫理を持って、価値観を持って生きているということです。そして、それは半ば翻訳不可能なものであって、もう、しょうがないけれど、みんなバラバラに自分たちの価値観の下で生きていくのが現代社会での公共空間だと、テイラーはこのように述べています。

宗教学の中でも、どちらの理解が妥当かというのはまた議論があって、私も答えは出せません。もう一回言いますと、ハーバーマスという人は、宗教言語で語られた発言は、やはりみんなに分かる形で翻訳して、一般言語に翻訳しないと議論できない、だから翻訳されるべきだと言っています。テイラーは、そうではなくて、みんなそれぞれ独自の価値観、独自の源泉をもって語って、そこはもはや、翻訳できなくはないかもしれないけれど、完全には伝わらないし、そしてまた宗教というものを特別視してはいけないと

言っています。みんな完全にフラットな形で発言権があり、宗教だけ特別視するのはおかしいというような形で宗教は位置付けるべきだと言っています。この辺はずっと、いまだに議論になっています。

ある意味で、ポスト世俗化社会というものについても、こういう二通りの理解があって、どちらがいいのだろうかというのは、いまだに宗教学の中でも揉めています。今、一番ホットトピックです。

そう考えたときに、そのような観点で『ラウダート・シ』をもう一回読み直してみると、この２つのモデルに、どちらにでも当てはまるような仕方で書かれている、非常に巧みな回勅であると私は感じました。

どういうことかというと、先ほどから吉川先生や神崎先生のお話の中にもあった、共通善とか人間の尊厳などという形で環境倫理を語っている部分が、このテキストの中にたくさんあります。そして、それは回勅の言葉で言えば、「理性によってみんなに理解されるもの」とされています。要は自然的な分野です。これは、言ってみれば、「みんな理解できるでしょう」モデルです。「みんな翻訳して、共通の言葉で語れるでしょう」モデルで書かれています。これに対して、「キリスト教信仰に基づいて語られていて、ここから先は完全に信仰のこと、秘跡の事柄ですよ」というような部分は、「自分たちの内部でしか通じません」 ということを自覚して書かれています。

そういう、ある意味で、この回勅は、２通りの読者層に向けた、使い分けて書かれた回勅だというように私には読めます。そう読んだほうが、むしろ面白いと思っています。

例えばですが、後者の「ここから先は対外的に語っているつもりはないですよ」というようなことが語られている部分、そこは奇しくも先ほど神崎先生も同じところを引用されていたのですが、その部分を見てみましょう。

「ここで私は、キリスト者に対して、信仰の確信に根ざすエコロジカルな霊性のためのいくつかの提案をしたく思います」と（216節）。神崎先生は「信仰の確信に根ざす」というところを強調していたのですが、逆に私はここを、「キリスト者に対して」という部分が結構大事で、「ここから先は内部にしか通じない話だけれど、ごめんね」というような、そのような意味合いとして読みます。そのような配慮がされたテキストだと言えます。

そして、面白いのが次の箇所です。「信仰者であろうとなかろうと、今日私たちは、大地は本質的に共通の相続財産であり、その実りは、あらゆる人の善益のためにある、ということに同意しています」（93節）。「信仰者であろうとなかろうと」という言い方は、まさに前者のレベル、つまりみんなに理解できる事柄のレベルに立っているわけです。大地は皆の共通善ですよねと。大地が共通善であるということは――本当に世俗社会において、みんなに理解されるかどうかは、いったんさて置きますが――人間全員にそなわっている理性的に理解される事柄、つまり自然的な事柄である、というわけです。この節は次のように続きます。「神は世界をあらゆる人のために創造されたがゆえ、信仰者にとってこの同意は、創造者への忠実さの問題です」（同）。共通善という人間全員に理解される同じ話をしつつも、その話をいわば外向きに、宗教外部へと翻訳するのではなくて、ここではむしろ内向きに翻訳しているのです。つまり、信仰者内部にとっては、このように信仰の言語に翻訳できますよということです。みんなに当てはまる、みんなが理解できる話は、ある宗教言語で宗教的に表現すると、こういう話ですよというように提示しています。

そういう意味で、ある種『ラウダート・シ』は、こういう箇所は他にも何カ所かあるのですが、世俗と宗教言語で書かれた内容をどのように翻訳し得るかというような可能性まで開かれたテキストだというように読めると思います。

その意味で、先ほどの神崎先生の話ともつながりますが、普遍的動機づけ、神抜きの動機づけだけでもいいのだけれど、逆に言えば、それを宗教的な動機付けに、普遍的には翻訳し得る可能性をも残している、そういういろいろな読み方ができるテキストではないかと思います。

まとめますが、まさにこのような形で回勅『ラウダート・シ』というテキストは、「倫理学的な価値に加えて、ポスト世俗化時代にも対応し得る宗教言語としての可能性を持っている」と私には読めますし、その意味で、現代社会における宗教の位置付けを再設定するようなポテンシャルを持った回勅として読むことができるのではないかと、私は思います。

環境倫理というテーマは私の専門ではないので、持続可能性というテーマは深められませんでしたが、「回勅『ラウダート・シ』を複眼的に読む」という関連で、何かの

示唆になれば幸いです。

　以上です。どうもありがとうございました。

（拍手）

【司会（篭橋）】　佐藤先生、どうもありがとうございました。

各報告へのコメント

篭橋 一輝
（南山大学社会倫理研究所 講師）

【司会（篭橋）】 私の専門は環境経済学で皆さんとは全く毛色が違うわけですが、全体討論に向けてのコメントという形で、少し私なりの理解も示しながら進めていこうと思います。

まず、『ラウダート・シ』が登場するまでの経緯の部分に関して、吉川先生のほうからもお話がありましたが、やはり1972年にローマクラブから出た『成長の限界』というのは、1つの大きなターニングポイントだったのではないかと思います。

これは何かというと、当時の経済は右肩上がりでどんどん成長していきましたが、その成長がずっと続いていったらどうなるかということを、当時は最新の手法であったシミュレーションを使って予測したものです。

そうすると、4つの経路で限界が来て、永続的に経済成長をしていくことはできないということが示されました。それは枯渇性資源の枯渇という形で現れるかもしれないし、汚染物質の吸収能力の限界であるとか、人口増加を支えるだけの食糧を生産することができないとか、そういった問題が出てきてしまうということです。これは当時、非常に衝撃的だったわけです。

その後に「持続可能な発展」という、1987年にブルントラント委員会によって示

された概念へとつながっていくわけですが、この『成長の限界』が出てから、経済学の中でどのように議論が進められてきたかということを、一応経済学の観点から少し触れておきます。

有限な空間と資源の中で、どうやって経済成長を永遠に続けていくことができるのか。それはそもそも可能なのかどうかということで、当時のマクロ経済学者、ロバート・ソロー（Robert Solow）であるとかジョセフ・スティグリッツ（Joseph Stiglitz）という、いわゆる経済学の「主流派」と呼ばれた人たちと、今日の神崎さんの報告にもあったハーマン・デイリー（Herman E. Daly）やジョージェスク・レーゲン（Nicholas Georgescu-Roegen）らに代表されるエコロジー経済学者の間で、意見が鋭く対立したわけです。マクロ経済学者が永続的な成長は「できる」と言ったのに対して、エコロジー経済学者は「できない」と、そんなことはそもそも不可能なのだと主張しました。「成長の限界」の有無をめぐって非常に議論が対立していったという流れがあります。

その中で 1980年代に、有名な「持続可能な発展（Sustainable Development）」という概念が出てきます。1987年には、よく言及される「環境と開発に関する世界委員会（ブルントラント委員会）」というものが開かれて、このブルントラント委員会の中で「持続可能な発展」という概念が提起されました。それを見ると、「将来世代がそのニーズを満たす能力を損なうことなく、現在世代のニーズを満たす発展」というように定義されたわけです。

その後、「持続可能な発展」というのは、いったい何かというところで、非常に多くの、それこそ「持続可能な発展」の定義付け自体が持続可能などと揶揄されるぐらい、いろいろな研究がなされましたが、『ラウダート・シ』はこの持続可能な発展をめぐる議論の延長線上に位置づけることができるのではないかと思います。結局、地球環境問題の解決の必要性が 1970年代からずっと言われているけれども、解決の見通しは立っていない。じゃあ経済問題はどうかと言えば、そちらも解決していない。貧困状態にある人たちは貧困なままということです。トマ・ピケティの『21世紀の資本』のように、経済的格差の拡大が資本主義の宿命なのだというような議論も出てきていますが、おそらくこうした現状に対する問題認識の下で、『ラウダー

ト・シ』は書かれているように思います。「持続可能な発展」という言葉が一種の枕詞として言われているようなところに、不満というか批判的な視点を持っているのではないかと思います。

私はカトリックの素養がないので、間違っていたら正していただきたいのですが、この「持続可能な発展」について、今までのシステムや思考方法を変えずに持続可能にしていこうよということではなくて、もっと実質的に、今までのように個別の問題として切り分けるような思考方法から、いろいろな問題はつながっているのだという思考方法に変える必要があるというところに、『ラウダート・シ』のメッセージがあるのかなと、私はそのように読みました。

それで、『ラウダート・シ』の中で何回か、経済とか市場というものに対する不信感が表明されているわけです。私は環境経済学を専門にしていますが、「なるほど、そうだな」と思わされる部分があります。

このスライドの引用を見ていただきたいのですが、「市場は、それ単独では全人的発展を保証できない」とか、市場には人を惑わすようなところがあるというようなことが言われています。環境との関連では、「『環境保護は、損得計算を基礎にするだけでは保障されない。環境は市場の力で十分に保護したり促進したりすることのできない財の一つ』だということをつねに心に留めおかねばなりません」と指摘されています。

私はこれを読んだときに、ある経済学者が思い浮かびました。経済学者といっても一枚岩ではありません。非常に多様です。その中で、残念ながら2014年に亡くなってしまいましたが、宇沢弘文という経済学者がいます。彼は「社会的共通資本」という概念を出していますが、その中で言われていることというのが、上の話にかなり近いようなことを言っているのではないかと思いました。

これは宇沢自身による社会的共通資本の定義ですが、「すべての人々が、ゆたかな経済生活を営み、すぐれた文化を展開し、人間的に魅力ある社会を持続的、安定的に維持することを可能にするような」ものが社会的共通資本として考えられています。「社会的共通資本は、一人一人の人間的尊厳を守り、魂の自立を支え、市民の基本的権利を最大限に維持するために、不可欠な役割を果たす」と彼は

言っているわけです。

さらにここで、宇沢は市場による社会的共通資本の管理を否定しています。「社会的共通資本は、たとえ私有ないしは私的管理」が現状として行われていたとしても、それは「社会全体にとって共通の財産として、社会的な基準にしたがって管理・運営されるべきである」というように、彼は言っているわけです。

これは、いわゆる環境経済学の中でよく議論される「外部不経済の内部化」論を超える視点を持っているように思われます。環境経済学では、環境が市場の外にあることで環境問題が起こるのだと考えられます。そのような問題認識から「外部不経済の内部化」論が出てきます。つまり、環境に適切な財産権を与えて、新たに環境を市場の中に取り入れれば、市場が再び効率的な資源配分を実現し、環境問題は解決するというものです。宇沢の社会的共通資本は、こうした環境経済学の考え方を根底から問い直しているのではないかと思います。

彼は、社会的共通資本の構成要素として、自然環境、社会的インフラストラクチャー、制度資本の三つを出しています。自然環境は森や川、海、大気など人間の生存に不可欠なものが含まれます。社会的インフラストラクチャーには道路や上下水道、電力などが含まれ、制度資本には教育、医療、金融などが含まれます。こういった人間の社会生活や暮らしに不可欠な要素については、市場や官僚機構ではなく、社会的基準によって社会的に管理しなければいけないというように論を進めていったわけです。

「社会的共通資本」は非常に魅力的な概念ですが、残念ながら経済学の中では、あまりこの概念は根付いていないのが現状です。今日は神崎先生や、他の方も少し言及されていたと思いますがおそらくこの概念を深めるためには、「共通善」などの倫理的な規範が必要となるにも関わらず、そこに踏み込むことなく議論を進めようとして、議論が中途半端な状態で終わってしまっているように感じます。ともあれ、私は宇沢の社会的共通資本概念を思い浮かべながら、この『ラウダート・シ』を読みました。

重要な点としては、やはり環境をどう考えるのかという論点に行き着くのかなと思うわけです。単純に功利的な視点でもなく、環境は「あらゆる世代に貸付けられてい

る」とか、「授かりものの論理に属している」とか、「いずれ次世代へと手渡さねばなりません」というように、『ラウダート・シ』の中では書かれているわけです。

では、経済学の中で環境というのはどう考えられるのかといえば、いわゆる「自然資本」という言葉で語られます。これは非常に人間中心的で、功利主義的です。つまり、人間にとって役立つもの、そういう自然環境の構成要素全てを「自然資本」としてとりあえず捉える。そしてそれを、自然資本だけでなく、先ほどの社会的インフラストラクチャー自然環境の人工資本とか、労働者の教育水準や技能水準を示す人的資本とか、知識や技術、それに加えて、それを利用する制度というものを包含して「生産的基盤」として考えます。この生産的基盤を次の世代に渡すことで、われわれは持続可能な発展を実現できるというように経済学の中では考えられています。ですので、一応「環境」というものが入ってはいます。

しかし、やはり私が問題だと思うのは、自然環境を「資本」概念で考えるときに生じる問題です。経済学では理論上、自然資本は他の資本と代替可能だという前提が置かれます。そうすると、結局、自然資本がなくなっても、人工資本で代替すれば良いという議論になってしまいます。

あるいは、「自然資本」という概念で捉えることで何が捨象されるかというと、自然資本という個別の要素は守られるかもしれないけれども、それは自然が持っている一体性、まさにこれは「十全性」と言ったらいいのかもしれませんが、「Integrity」が捨象されてしまうことにも問題があるのかもしれません。自然や環境のIntegrityという概念を経済学の中にどう取り入れるかというのが、これから問われてくるかなと思っています。

経済学というのは、ほんの少し何かが変化したときにどういう影響があるかということを分析するのは得意なのですが、そのように分析していったときに、「総合的なエコロジー」というような、「つながり」というところにどこまで踏み込めるのかという点が課題になると思います。それがどこまでできるか、不安なところもありますがやはり経済学として取り組んでいく必要があると考えています。

前置きが長くなってしまいましたが、全体討論に向けて、論点を全部で６つ、挙げたいと思います。

1つ目は「Integral development」という考え方についてです。「Integral」という言葉に関して、これはいろいろ訳出されるときに、吉川先生も非常に苦労されたとおっしゃっていましたが、仮に「傷がまったくない状態」と考えるとして、「Integral development」という言葉と「Integral human development」というのは一緒だと考えていいのかということが、素朴な疑問としてあります。英語版だと両方出てきて、どのように考えればいいのかという、これは確認です。

もう1つ、仮に「全人的発展」というものがキリスト教の中で大切にされてきたと考えるとしたら、それは、例えば私のようなキリスト教の信仰を持っていない人でも実現可能なのでしょうか。

2つ目に、『ラウダート・シ』の中で、今日も佐藤先生の話の中で、全人的発展というのは、個人レベルよりも割と集合的なほうにウエイトがあるというお話があったと思いますが、「全人的発展」と「持続可能な発展」の関係をどのように考えればいいのかということです。全人的発展というものは、それ自体が目的なのか、持続可能な発展を実現するための手段としても考えることができるのか、その辺の概念整理について、佐藤先生だけではなくて、皆さんにお聞きできればと思います。

3つ目は「総合的なエコロジー」の実践的な側面についてです。「総合的なエコロジー」という考え方が出てきていて、それは、考え方としてはこうですよというように提示されているわけですが、それがどのように実践されていると考えたらいいのかということに関心があります。私が関わっているランドケアという、オーストラリアで始まった取り組みがあるのですが、「総合的なエコロジー」は実はその一つの表れとして考えることができたりするのかなと思っています。

ランドケアはもともとオーストラリアで1986年に始まった取り組みで、塩害とか外来種の問題とか、いろいろな環境問題が起きたときに、植生の回復を通じて解決を図る取り組みとして登場しました。それで、この写真のように植林をバーッとしていって、地下水面を下げるということをしたり、あるいは、昔は丸裸の土地だったところに一生懸命、原生植物を植えていったりして、そこに生態系を取り戻すということをしています。ここでお示ししている写真では豊かな生態系に見えますが、昔は金鉱で、ぺんぺん草一つ生えていないような土地だったところです。これは生態系管理の話で

すが、それだけではなくて、例えば若い、中学生の子たちの環境教育の場としても今はランドケアが活用されていて、植林体験であるとか外来種駆除であるとか、そういうプログラムとしてもオーストラリア各地で広くランドケア活動が行われています。

そのように考えていくと、在来生物とのつながりを回復しようとしたという、このランドケアのもともとの出発点から、活動が進められていくに従って、コミュニティのつながりをもたらし、あるいは、アボリジニの人たちとの、伝統文化とのつながりをもたらし、さらに、若い人たちの教育を通じて、世代間のつながりをもたらしたというように、失われていたつながりを取り戻すという意味で、ランドケアは「総合的なエコロジー」と共通点があるのではないかと思いました。ランドケアを「総合的なエコロジー」の１つの実践として考えることは可能なのか、あるいはこれが全人的発展をもたらすのか、そのようにモヤモヤと考えていたのですが、その辺りについて聞いてみたいというのが、３つ目の質問です。

４つ目は、市場の役割についてです。「市場」には欠点があるという指摘は、私もそう思います。市場メカニズムだけで全て問題が解決するとは到底思っていませんが、ではそれをどう乗り越えていくかということを、この場でぜひ議論できればと思います。例えば、市場というものがお金しか見ずに取引をするということがもし問題なのであれば、例えば地産地消のような、生産者と消費者の間で「顔が見える取引」というものをつないでいくような可能性はあり得るように思いますし、価格以外の情報をどのように共有していくかという点も重要な視点になると思われます。

神崎先生の今日のお話の中で、動機づけが重要だというご指摘がありました。「適切なふるまいへの動機や傾向を伴った態度」を取るようになるためには、情報を与えるだけでは不十分なのではないかという議論もありましたが、やはり知ることの大切さにも言及されていました。そういったところも併せて考えていければと思います。

５つ目は、これは私の最初のほうの疑問とも関連しています。私自身としては、やはり環境や自然は次の世代に引き継いでいく部分が絶対にあると思っていて、キリスト教の信者でなくても「土地や自然は神からの借り物である」ということに割合にシンパシーを感じるのですが、やはりキリスト教の信者ではない人に対しては、それは

スッと入らない部分があると思います。それは宗教者と世俗社会の話につながるのかもしれませんが、世代を超えて引き継いでいくべき自然や環境に関して社会を納得させていくにはどうしたらいいのかというのが 5 つ目の論点です。

最後に、6 つ目の論点として、『ラウダート・シ』の現実のインパクトについてお伺いしたいと思います。3 人の先生方は、それぞれの評価をされていたと思います。神崎先生は、バランス良くいろいろな論点が満遍なく散りばめられていて、学生に読ませるテキストにもなり得るというような評価でした。佐藤先生は、一種の世俗性と宗教性のジレンマであるとか、あるいは、それでも両方に語りかけるような巧みさを持っているというような評価でした。吉川先生からは、教皇からのメッセージ性を感じたというようなお話があったと思います。

そこでそれぞれの先生にお聞きしたいのは、「総合的なエコロジー」という概念が『ラウダート・シ』の中で出されて、それが一つの重要な転換点といいますか、重要な概念であると考えるときに、それはまずキリスト教にとってどれくらいのインパクトがあるものなのかということを、まず佐藤先生に教えていただきたいと思います。また、宗教性の方向ではなくて、世俗のほうに向かって、この『ラウダート・シ』の「総合的なエコロジー」という考え方はどういう影響を与えるのでしょうか。それは世俗の立場からの環境倫理に、どのような影響を与えると考えられるかということを、神崎先生にお伺いしたいと思います。あるいは、キリスト教信者としての信仰に対して、『ラウダート・シ』の「総合的なエコロジー」というのはどのような影響を与えるのかということを、吉川先生にお聞きしたいと思います。

長くなってしまいましたが、私のほうからのコメントは以上です。

【司会（篭橋）】　それでは、限られた時間ではありますが、今の私のコメント、疑問点にお答えいただくという形で議論をスタートさせたいと思います。

では、神崎先生からお答え頂いてよろしいですか。

【神崎】　最後のほうで、消費者が環境的な徳を身に付けられるのかどうかという話をされていましたが、「消費者」と限定が付いてしまうと、それはそれで環境的な徳の内容自体が、そこで想定されるものが最初から制限される気がします。

少なくとも環境徳倫理学の中で言われている徳というのは、必ずしも人間中心主義的なものを排除していないわけです。人間にとって経済が回っていくような行動に向けた態度みたいなものがこの中に含まれるので、例えば今日のような話の中では、単なるリサイクルとか、そういう技術に貢献するとか手伝うというのは不十分だという話になるのだと思うのですが、少なくとも消費者としての環境的な徳という話をするときには、リサイクルに対するある種の態度みたいなものも評価されるだろうと思います。ただ必ずしもそれだけでは十分ではないということです。それだけで足りるかどうかというのは別としても、そうしたものも、ある種、徳としてみなされるだろうということです。それが１つです。

あと、途中で「Sustainable development」と「Integral human development」の関係についておっしゃられていましたが、今日言及するのを忘れていた１つが何かというと、ハーマン・デイリーも言及している、ジョン・スチュアート・ミルの『経済学原理』の中での話です。

ジョン・スチュアート・ミルという、哲学者であり経済学者の元祖でもある人がいるわけですが、『経済学原理』という文書の中で「ステーショナリー・ステート」という話をしています。これは何かというと、成長が止まったような経済の在り方の状態は望ましいことだというように彼は言っているわけです。今はうろ覚えなので雑な言い方しかできないのですが、自然が強制して人類をステーショナリー・ステートに押し上げる前に、人々は自ら、そうした経済成長が止まった状態に入ることが望ましいのだというように言っています。そうした状態にあってこそ人間性の本当のディベロップメントがあるのだと。要するに、道徳だとか宗教だとか価値観も含めた、そうした意味での人間性の向上みたいなものがあるというような言い方をしています。

ですので、１つは、経済学と倫理学の中間にいるような人物から見た「Sustainable development」と「Integral human development」の関係について、できるコメントがあるとしたら、おそらくミルのそこのコメントではないかと思います。以上です。

【司会（篭橋）】　どうもありがとうございます。それでは、佐藤先生、お願いします。

【佐藤】　私は環境思想のプロフェッショナルではありませんし、経済は全く分からないのですが、最後の一番大きな問いは後回しにするとして、私がコメントできそうなのは２つです。

『ラウダート・シ』における全人的な発展、個人にウエイトを置いた全人的な発展と全体にウエイトを置いた全人的な発展は目的・手段関係になっているのか、あるいは、もしそうだとしたら、どちらが先なのかという話があったと思います。この点に関しては、むしろそれは部分・全体の問題であって、結局のところ、部分の完成がなければ全体の完

成ができない、全体がなっていなければ個人の発展はできないという、『ラウダート・シ』の議論を使えば、おそらくそのような答えになると思います。

ですから、どちらが目的かといえば、「どちらも目的」と、まず言われると思います。読んでみると、138ページの156節には、共通善とは「集団と個々の成員とが、より豊かに、より容易に自己完成を達成できるような社会生活の諸条件の総体」と言っているのですが、結局、目的・手段の関係ではなくて、全体と部分の関係と捉えるのが良いのではないでしょうか。

その上で、もう１個、私に答えられそうなのは、「非キリスト者に対して、自然は借り物であると納得させるにはどうしたらいいですか」という、５番目の質問があったと思います。ここは実際、今の宗教学、宗教哲学でも一番大事なところで、今日の私の話にもダイレクトにつながるのですが、宗教的な信仰を持っていない人にそういう話を納得させられるのですかといったときに、先ほどのチャールズ・テイラーの立場では「翻訳不可能なのだから諦めましょう」となるかもしれませんが、ハーバーマスであれ私であれ、そこはもう少し翻訳を頑張りましょうよということです。

その際に大事なのは、宗教か哲学思想全般かというような形ではなくて、宗教的な背景に似たものは、われわれだって文学やら芸術やら、さまざまなものを通して感じるだろうというように、取りあえず想定します。

自然は「神様からの借り物」だということは分からないかもしれませんが、例えば、夜中にきれいな星空を見上げてみなさいよと。そうしたら、うっとりするでしょうと。「自分はちっぽけだな」みたいな、ある意味で、宮沢賢治的に感じるかもしれません。そういうさまざまなミニマムな体験は決して宗教的なものと懸け離れていないし、また、宗教的なものをそんなに懸け離れた、特殊なものとして理解しすぎることのほうがまずいのではないかということです。

ですから、「使われる言語は特殊だけれど、そこで捉えている経験

の質は、そんなに変わらないんじゃないの？」と解釈、翻訳していくようなトランスレーターが必要なのではないかというのが、私の答えになると思います。最後の大きな話は後回しにして、こうなるかと思います。

【司会（篭橋）】　どうもありがとうございます。それでは、吉川先生、お願いします。

【吉川】　「Integral development」と「Integral human development」は同じかというところですが、「Integral human development」というのは、「全人的な発展」という意味では「Integral development」と訳語は重なりますが、人間の人格的な発展に注目したときの言葉です。そして、その社会的な存在でもある私たちの社会全体の発展を言うときに「Integral development」と使い分けている部分が、ここにたくさん出てくるかと思います。その関係ですが、先ほど佐藤先生がおっしゃったように、目的と手段というのではなく、部分と全体であるということが言えるかと思います。

最後に、これはキリスト教の信仰に対してどんなインパクトを与えたのかというところは、今日、報告のときには少ししか触れませんでしたが、私たちの信仰の中で「神とのつながり」「自分とのつながり」「人間相互のつながり」ということは、これまで繰り返し強調されてきましたが、「自然とのつながり」にも調和を得られなかったならば、本当の意味で包括的な和解も得られないのだということです。つまり、「自然とのつながり」も私たちの救いに関わる次元として明確に言葉にしている点が、キリスト教の信仰のあり方にも大きなインパクトを与えていると思われます。

「和解」とか「救い」というのはすごく包括的な概念だと思うのですが、救いを得るために、私たちキリスト者の中で忘れがちであった「自然とのつながり」を回復しなさいと、「神様、神様」と神の存在だけを意識して祈っているだけでは駄目だよという叱咤激励もすごくあるかと思いました。

あと、時間がなくて最後のスライドをお見せしていませんでした

が、ではどうすれば総合的なエコロジーを得られるのかということについてです。回勅の最後の方に、やはり立ち止まって、時間をかけていくということ以外にはないのだと書かれています。それが、この「rapidification」という、効率性至上主義に対処し、解決していく一つの方法でもあるのだということです。

壮大な終末論のように環境問題を概観する中で、最後には、本当にささやかな、賛美と感謝の祈りのときを持つことの大切さが書かれています。食事のときに、いのちの糧を与えてくださった神に心を向けるということや、ささやかな日常の言葉遣いとか、本当に小さな配慮こそが大切であると書かれています。

ちょうど先ほど休み時間に、上智大学神学部の竹内修一先生がとても示唆に富むコメントをくださったのですが、この『ラウダート・シ』というのは、やはり祈りであるということです。私は「メッセージ性」という言葉を使いましたが、教皇フランシスコのメッセージというよりは、教皇フランシスコを通じてわれわれに発せられた創造主のメッセージだと、信仰をもつ者はそのように教皇文書を受けとめます。その祈りであるということと、まず創造の福音として、「創造された」というところに思いを馳せるということからスタートするべきだというご意見をいただき、「なるほどな」と思ったりしておりました。

【司会（篭橋）】　どうもありがとうございます。私にとっても、全人的発展の部分と全体という理解の仕方についてはきちんと読めていなかったので、皆さんに教えていただいて非常に良かったと思います。

私ばかり質問しても申し訳ないので、ここからはフロアの方と一緒に議論していきたいと思います。質問やコメント、ご意見があれば、ぜひ、どなたでも結構ですので、挙手をしてください。

では、まずそちらの方。

【参加者A】　佐藤啓介先生に質問または要望をさせてください。

私はいくつかの大学で非常勤講師をしていまして、経済学や財政

学を専門としています。その上で質問と要望なのです。今日の先生のモデルですと、宗教と世俗社会という２つの概念の説明をされているのですが、自分の資金的な獲得ですとか所有権の拡大を抑えれば、環境は破壊してもやむを得ないと、形あるものはいつか壊れるものなのだと、やはりそういった思想が根強くあると思いますが、そうしたことは今日の先生の説明されたモデルの中でどのように入ってくるのでしょうか。

むしろ世俗社会のほうが持続可能な環境ということに理解があったりもするので、そういった思想、やはりマルキシズムとの闘いというのがカトリシズムの中にあって、そういった闘いというのは今でもはっきりと、闘いが続いているのだなということを『ラウダート・シ』から読み取れます。

そういった視点が、この説明だと、どこにどのように入っているのか、はっきりと分析をしていただきたいという要望、または質問です。以上になります。

【佐藤】　ありがとうございます。今のご指摘は非常に大事なところです。先に補足しますと、そのモデルは主に議論の空間、言説の空間を説明するものであって、これ自体が生活空間ではないということは、まず押さえておいてください。あくまで言語が通じる空間というようなイメージで、まず捉えていただきたいと思います。

その上で、実は先ほどの篭橋さんの「総合的なエコロジーはキリスト教に対してどんなインパクトがあるのですか」というところに答えようと思っていたのですが、まさにそこに関わってくるところです。

実は、今ご指摘もあったと思いますが、キリスト教のエコロジーの思想において伝統的に、一言で言うと、エコノミーが一番苦手な分野だったと言えます。経済に関する神学というのは、キリスト教は非常に苦手なんです。そんなに得意としません。政治神学とか環境神学はまだしも、経済神学はなかなか展開しにくかったのです。その意味でも、私が先に答えておくと、総合的エコロジーがキリスト教にどれだけのインパクトがあったのかというと、「経済をもっと考えましょう」ということを

強調したことが、端的に言えば、一番大事なインパクトだと思います。

祈りとか信仰生活とかも全部、経済を無視しては駄目だと。その意味において、例えば、宗教と世俗社会を説明するために私が描いた世俗社会や信仰集団といった領域の一つ一つは言説、あくまで議論の空間のイメージだと先ほど申し上げましたが、お金というのは、まさにこの領域の境界を無視して、さまざまにつながっています。ある意味で、全体に流通しているようなお金の流れがあるわけで、おそらく先ほどの経済の議論がどこに位置するかと言うならば、この言説を越えて全てに流れているお金の問題があります。そして、そこを考えましょうよというのが『ラウダート・シ』のメッセージというようにも言い替えられると思います。

ご指摘は、非常に大事な質問だと思います。答えになっていますかね。

【参加者A】　はっきり言うと、「言説」だということで逃げないでいただきたいと要望します。宗教と世俗社会に加えて、やはり３つ目の丸を描く必要があると思います。

【佐藤】　取りあえず、扱った論者の人たちの議論が言説の空間というイメージなので、それを逃げていると言われても困ってしまうし、そう言わざるを得ないのですが、もしあえて言うならば、信仰領域と無信仰領域を包含する世俗社会という３つ目の大領域というのを、経済問題のレイヤーというように再設定することは必要だと思います。

【司会（篭橋）】　いろいろ議論があるかもしれませんが、いったんここで別の方に移らせて下さい。いろいろな方の意見を出していただきたいので。では、次の方どうぞ。

【竹内】　上智大学の竹内修一です。三人の方々への質問というよりも、副題が「『ラウダート・シ』を複眼的に読む」となっていますので、一つの読

み方として、私の読み方を述べさせていただきたいと思います。吉川先生が先ほど触れてくださいましたが、この「ラウダート・シ」という言葉は、「ラウダート・シ、ミ・シニョーレ」(わたしの主よ、あなたはたたえられますように)という、アッシジの聖フランシスコの祈りの冒頭の言葉です。たたえるとは、賛美のことですが、ユダヤの人々にとって、賛美と感謝は、祈りの原点です。

ですから、教皇フランシスコは、その初めから終わりに至るまで、祈りをとおしてこの回勅をまとめたはずだ、と私は思います。事実、彼は、二つの祈り(「わたしたちの地球のための祈り」「被造物とともにささげるキリスト者の祈り」)をもってこの回勅を終えています。このことは、忘れてはならない点だと思います。

吉川先生も少し触れられましたが、現在、「環境」という言葉は、ある種の極めて限られたイメージで使われます。しかし、キリスト教のパラダイムでそれを見るとき、その根底には、「創造論」(creation)があることを忘れてはならない、と思います。

『ラウダート・シ』の77番には、次のように記されています。

> 「みことばによって天は造られた」(詩編33・6)。これは、世界が、混沌や偶然からでなく、一つの決断の結果として生じたことを告げ、またこのことは世界をいっそう称揚させます。ことばによる創造は自由な選択を表しています。宇宙は、全能を勝手気ままに行使した結果、権力の誇示や自己主張の欲望の結果として生じたのではありません。被造界は愛の秩序にあずかっているのです。神の愛が、創造されたすべてのものを動かす原動力です。すなわち、「あなたは存在するものすべてを愛し、お造りになったものを何一つ嫌われない。憎んでおられるのなら、造られなかったはず」(知恵11・24)なのです。このように、あらゆる被造物は、世界における自分の場所を授けてくださる父の、優しさの対象です。もっとも小さなものの束(つか)の間のいのちさえ、神の愛の対象であり、存在しているほんの数秒間、神は愛情深くそれを包み込んでくださいます。

この「みことばによって」という表現は、新約聖書にも受け継がれま

す。「ヨハネによる福音書」は、次のような言葉で始まります。

> 初めにことばがあった。ことばは神と共にあった。ことばは神であった。このことばは、初めに神と共にあった。万物はことばによって成った。成ったもので、ことばによらずに成ったものは何一つなかった。ことばの内にいのちがあった。いのちは人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった(ヨハネ1・1-5)。

ここで語られる「ことば」(ロゴス)は、イエスと解釈していいでしょう。人々は、彼を理解できなかったので、彼を殺しました。さらに、次のように語られます。「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理(まこと)とに満ちていた」(ヨハネ1・14)。神のみことばが、一人の人間となった(受肉)と語られます。神の恵みと真理が見える形となったもの、それがイエスにほかなりません。

「真理」は、ギリシャ語の「アレーテイア」ですが、ヘブライ語の「エメト」に遡ることができる、と言われます。その意味は、「慈しみ」「真実」「まこと」などです。教皇フランシスコが、好んで使うことばです。

このことを踏まえて、99番を見てみますと、次のように語られます。

> 「万物は御子によって、御子のために造られました」(コロサイ1・16)。キリスト教の世界理解では、全被造界の運命は、初めからおられたかたであるキリストの神秘と密接に結ばれています。ヨハネによる福音書の序文(1・1-18)は、キリストの創造的な働きを神のことば(Logos)として啓示しています。しかし、それから序文は、思いがけなくも、この同じことばが「肉となった」(ヨハネ1・14)というに及びます。三位一体の一つの位格(ペルソナ)が創造された宇宙世界に入り込み、十字架に至るまで、運命をともにしてくださいました。世の始まりから、とりわけ受肉を通して、キリストの神秘が、一つの全体としての自然界において、その自律性を妨げることなく、隠れたしかたで働き続けています。

このように、創造においては、ロゴスと呼ばれるイエス・キリストの存在を抜きにしては語れません。

吉川先生も少し触れてくださいましたが、「和解」という言葉は、創

造論から救済論に向かっており、事実、その根底には、イエス・キリストにおける和解という理解があります。エフェソの信徒への手紙には、次のような言葉があります。「こうして、時が満ちるに及んで、救いの業が完成され、あらゆるものが、頭であるキリストのもとに一つにまとめられます。天にあるものも地にあるものもキリストのもとに一つにまとめられるのです」(エフェソ1・10)。エイレナイオスの言葉と使えば、「キリストにおける再統合」です。

環境問題について考察するにあたっては、やはり、いったん「創造論」に立ち戻らなければならない、と思います。そうしないと、少なくとも、教皇フランシスコの意図からは大きくずれてしまうでしょう。

最後に、篭橋さんがおっしゃった「integrity」という言葉ですが、それには、「誠実」「高潔」「正直」「真摯」などの意味があります。「integration」は、確かに、「総合」「統合」といった意味ですが、教皇フランシスコが「integral environment」と語るとき、その背景には、そのような意味もあるかもしれません。これは、私の一つの読み方です。三人の方々には、それぞれ刺激をいただきましたので、感謝申し上げたいと思います。ありがとうございます。

【司会(篭橋)】　どうもありがとうございます。それでは、後ろの方。

【参加者B】　まず佐藤先生と吉川先生に質問なのですが、私はこの『ラウダート・シ』という回勅の中で一番大事なところ、少なくとも今、日本で読むときに大事なところは、80節だと思います。

80節の、4行目、「発展を必要とする世界を創造なさることで、神はある意味ご自身を制限しようとなさったのです。つまり、私たちが悪、危険、苦しみの源と考える多くのものを、創造主に協力する働きに私たちを引き入れるための、現実における生みの苦しみの一部にすることによってです」と書いてあるのですが、私はここのところが一番、この回勅の中で、世俗の人たちに対して翻訳しにくいところだと思っています。

私は実際に被災者ではありませんが、福島の原発の事故において、10万人前後の人たちが住んでいるところで苦しんでいるわけです。その苦しみというのが、「創造主に協力する働きに私たちを引き入れるための、生みの苦しみの一部である」というような、ストレートなメッセージとして本当にこれを言えるのかどうかということです。

吉川先生にはカトリックの立場から、佐藤先生には世俗的に翻訳するという立場から、お答えいただきたいと思います。

それから、神崎先生には全く別の質問です。先ほどジョン・スチュアート・ミルの話がありましたが、定常経済の倫理学というのが考えられると思います。経済学の中では、高３の政治経済のテキストの中でも「規模の経済」といって、経済というのは規模が大きくなると発展していくのだというような考え方があります。でも、定常経済というのは、そういう考え方に対して、高校の教科書に書いてあるようなことからも全然違うものを考えていくということです。リージョナルな経済、あるいは、本当に仲間内で集まってやる経済活動など、そのようなこともあるのではないかと思います。

先ほど佐藤先生から、経済神学がないという、初めて出てきたというようなお話もありましたが、そのことと関連して、定常経済の環境倫理みたいなところで何かコメントがあればお願いします。こんなアイデアがあるよということがあれば、お答えいただければ幸いです。以上です。

【司会（篭橋）】　どうもありがとうございます。それでは、吉川先生、お願いします。

【吉川】　ありがとうございます。今ご指摘のところの４行目、「発展を必要とする世界を創造なさることで神は……」のところなのですが、ここは「49」という注が付いています。これは、今、カテキズムの本が手元にないので明確なことが言えませんが、ただ、ここで言っていることは、今おっしゃった福島のような「生みの苦しみ」とは全く別のコンテクストだと私は理解して読んでいます。

例えば、よく「なぜ神様はこんなことをなさるのか」というような質問が出たりしますが、そういうものを含めて、創造主に協力する働きのためにそれを引き起こしたと言っているのではなくて、私たちが発展を遂げていく、人として生きていくプロセス、完成に向かっての歩みの中でのさまざまな問題として言っていると思っています。

私は神学が専門ではないので、ここの神学的な解釈はできません。

【司会（篭橋）】　では、佐藤先生、お願いします。

【佐藤】　今、吉川先生にお答えいただいたことにつながりますが、ここの神学的な解釈は私もまだ分からない、たちどころには答えられません。ただ、これはあくまで私自身の立場という話になりますが、悪とか苦しみというものに、目的論的に何か存在意義を与えるという、伝統的な神義論と呼ばれるようなタイプの議論がキリスト教で展開されてきましたが、これは正統な神学の解釈としてはそういうものがあるとしても、現代において、そのような神義論を使って、悪や苦しみの正当化を図ること自体はもう危ういのではないかと私は思います。そういう意味で、この箇所がどう読まれるか分かりませんが、少なくとも悪とか苦しみまでをも人間の完成のための一部のプロセスとして組み込むのではない翻訳が求められるのではないかと、私は考えます。

私は専門的に悪や苦しみについてよく考えます。カトリック神学はちょっと自信がありませんが、プロテスタント神学などでは、そういう悪とか苦しみを仕方がないもの、あるいは必要悪として位置付けるのではなく、むしろ神もまたそれに苦しむというような形で、いわば「共に苦しむ神」みたいなイメージを持って理解しようという議論があることは申し添えておきたいと思います。

【司会（篭橋）】　ありがとうございます。それでは、神崎先生、お願いします。

【神崎】　ありがとうございます。私がご質問の意図を完全に把握しているか

どうか自信がないのですが、例えばハーマン・デイリー自身が、これからの経済学、つまり環境経済学というのは、分配と再配分という、これまでの経済学が扱ってきた２つの問題に加えて、第３の問題として、規模という問題を扱わなければいけないということを言っているわけです。これはもちろん、地球の有限性の範囲内での持続可能性という議論の中から出てくるものです。

地球の有限性の中で何とかやっていかなければいけないという議論自体は昔からずっとありまして、例えばケネス・ボールディングだとか、そういう経済の人もいるわけですし、日本人で言うと宮本憲一とかが議論してきたわけです。

特に、もしかしたらこれがお答えになるのかもしれませんが、宮本憲一の議論の重要なものの一つは何かというと、日本の公害です。経済成長の段階において公害が生じてきたときに、経済成長と環境保護、あるいは人間の健康の保護というのは両立し得るのだという調和論を批判したというところがあるわけです。もしここに経済学と倫理のつながりというものを見るのであれば、過去の経験、過去にどういうことが起こったのかということを、われわれはもっとシリアスに受け取るべきだということが、おそらく１つ、倫理的に考えられることとしてあるのではないかと思います。

これが求められていた答えなのかどうかは、あまり自信がありませんが。

【参加者B】　満足しました。宮本憲一先生の本は私も、ほとんど読んでいませんが、１冊だけすごく大事にしているものがあって、今おっしゃられたような、過去の経験の重要性ということを言っている本だと思いました。

吉川先生と佐藤先生のお答えにも、私は納得しました。ありがとうございました。

【司会（篭橋）】　どうもありがとうございます。それでは、先ほど手を挙げられていた方。

【参加者C】　今日はどうもありがとうございました。篭橋さんにお尋ねしたいと思

います。

お話を聞いていると、私は特定の宗教を持っていないのですが、すごく社会主義的な、計画経済的なことをイメージしたような話をされています。それに、現代はより利権を守る方向に行っていて、それでは駄目だよということを、私自身は読んでいないのですが、この『ラウダート・シ』は提言しているというように、私は今回の講演会を自分なりに吸収したのですが、どうなのでしょうかというところをお聞きしたいと思います。

【司会（篭橋）】　私は、計画経済というのは考えていなくて、もっとリベラルなほうを考えています。個人の自由というのを担保している中で、いわゆる極度な人間中心主義が批判されているのであって、別に個人の自律とか個人の自由が否定されているわけではないと思うんです。個人の自由な意思決定であるとか自由な選択というものを尊重しながら、でもそこに、例えば世代間倫理といった箍を掛けていくにはどうしたらいいのだろうという、悩みのプロセスという感じです。

ですので、私は別にそこで、例えばこの財の供給は中央政府が計画的に行う社会がいいのだ、というようなことは全く考えていません。むしろ逆です。その方向で、『ラウダート・シ』というのは、決して個人の自律性であるとか自由とコンフリクトを生じさせるものではなくて、むしろその中でどのようにそれを突破していったらいいかということを考えているというように、私は読みました。

【参加者C】　分かりました。

【司会（篭橋）】　そろそろ時間ですが、どうしてもこれは言いたいという方がおられましたら受け付けますが、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、長丁場でしたが、皆さん、本当にありがとうございました。閉会の前に、上智大学生命倫理研究所長の滝澤先生から閉会の辞をいただいて、閉会にしたいと思います。

では、滝澤先生、よろしくお願いします。

閉会の辞

滝澤 正
上智大学生命倫理研究所長

【滝澤】　上智大学生命倫理研究所長の滝澤でございます。本日は南山大学社会倫理研究所との共催シンポジウムということで、大勢の方にお集まりいただきまして、どうもありがとうございます。

上智大学と南山大学は姉妹校です。南山大学と上智大学が姉妹校であるということを一番よく示すのは、上南戦というものです。この上南戦も伝統がありまして、もうずっとやっているのですが、その次ぐらいに伝統があるのが、この南山大学の社会倫理研究所と上智大学生命倫理研究所の共催シンポジウムではないかと思っています。ですから、スポーツだけではなくて、学問の分野でも、南山大学と上智大学は常に協力して、共に発展を遂げましょうということで、やってきているわけです。

私は以前、学長をやっていまして、そのときに、南山の学長であられますカルマノ先生と、よくいろいろな会議でご一緒申し上げました。その他にも、上智大学と南山大学は、いろいろな人的つながり、非常に深いつながりがあろうかと思います。そういうことで、この共催シンポジウムが、今後も重要なテーマについて展開されていくことを、上智の一方の当事者として、南山の社会倫理研究所の先生方にお願いしたいと思うわけです。

本日は非常に実りのある、この『ラウダート・シ』をめぐるシンポジウム

ができたということで、報告者、それから参加してご質問してくださった皆さま方に感謝を申し上げたいと思います。

テーマにつきましても、「ぜひこういうテーマを扱ってほしい」というものがありましたら、お申し出いただければ、さらにこの共催シンポジウムがより良くなるのではないかと思っております。

先ほどの話にありましたが、世俗の問題と、キリスト教ないしはカトリックの問題の、ちょうど接点のテーマが今日、扱われたと思います。それは別に今日の『ラウダート・シ』の問題だけではなくて、カトリックの大学として常に考えておくべき事柄ではなかろうかと思います。そういう意味で、今日のテーマは非常に発展性のある、時宜を得たテーマではなかったかと思います。

本日の盛会を感謝申し上げて、私の終わりの挨拶にいたしたいと思います。今日はどうもありがとうございました。

（拍手）

【司会（篭橋）】　滝澤先生、どうもありがとうございました。

今回のテーマとして「持続可能な発展は可能か」と問うているわけですが、これはオープンクエスチョンということで、皆さんが今日、何か感じられたことなどをまた持ち帰っていただいて、引き続き議論できればいいなと、企画者として思っております。

今日は本当にありがとうございました。最後に、今日の３人の先生方に拍手をして終わりたいと思います。ありがとうございました。

（拍手）

あとがき

上智大学生命倫理研究所との共催シンポジウムも2016年で6回目となりました。今回はローマ法王が2015年に出した回勅『ラウダート・シ』に焦点を当てましたが、もしかするとこの回勅のことを今回初めて知ったという読者の方もいらっしゃるかもしれません。『ラウダート・シ』は「回勅」という形で出版されているため、キリスト教を信仰していない読者にとっては、どこかとっつきにくい印象を受けることは否めません。かく言う私も、特定の宗教的信仰を持たない典型的な日本人の一人であり、最初はそのような印象を持っていました。しかし、ひとたび『ラウダート・シ』を紐解けば、それがキリスト教の信仰を持たない人にも多くの示唆を与えてくれる書物であり、キリスト教という立場を超えて、様々な観点から読み解かれるべき内容を有していることが分かります。将来世代を含めた人類全員が尊厳を持った暮らしを営み続けるために、いま改めて私たちが考えなくてはならないことは何か。『ラウダート・シ』が提示するこの問いは、私たちがこれまで希求してきた「持続可能な発展」というアイデアを、人間の尊厳という観点から再考することを促しているように思われます。このようなユニークな内容を持つ『ラウダート・シ』に対して「食わず嫌い」に陥ることなく、宗教的立場を超えて自由に読み、語

らう場をつくりたい――これが今回の共催シンポジウムの企画に至った私たち社会倫理研究所所員の共通の想いでした。今回のシンポジウムでは、環境学、倫理学、宗教学、経済学といった多様な観点から『ラウダート・シ』を複眼的に読み、フロアを交えて自由闊達に議論することができたのではないかと自負しています。実はいま私たちに切に求められているのは、こうした個々の主義・信条・立場を超えて、リベラルに語り合うことのできる「場」を未来に引き継いでいくことなのかもしれません。

最後に、今回のシンポジウムでは、藤城清治事務所のご厚意により、広報用のポスターやチラシ、講演録に「太陽の賛歌」という作品の画像を利用させて頂きました。藤城清治氏によるこの作品は、アッシジの聖フランシスコが晩年につくった「太陽の賛歌」の内容を描いたものですが、実はこの聖フランシスコの歌の一節から、『ラウダート・シ』のタイトルはとられています。このように『ラウダート・シ』と非常に縁の深い、著名な作品を本シンポジウムで利用させて頂くことができ、企画者として感無量の思いを強くしています。この場をお借りして、「太陽の賛歌」の作品の利用をお許し頂いた藤城清治様、藤城亜季様、ならびに藤城清治事務所の皆さまに厚く御礼を申し上げます。

南山大学社会倫理研究所
篭橋一輝

神崎 宣次

南山大学社会倫理研究所・上智大学生命倫理研究所共催

公開シンポジウム 2016 講演録

持続可能な発展は可能か

回勅『ラウダート・シ』を複眼的に読む

発行日　2017年 3月 15日
編　者　篭橋一輝
発行者　南山大学社会倫理研究所
〒466-8673
名古屋市昭和区山里町 18
電話　(052) 832-3111（代表）
代表者　丸山雅夫
E-mail　ise-office@ic.nanzan-u.ac.jp
http://rci.nanzan-u.ac.jp/ISE/
組版・装丁　株式会社サウザンドデザイン
印刷・製本　株式会社ウエルオン
ISBN　978-4-908681-34-9
表紙デザイン　「太陽の賛歌」2015　©Seiji Fujishiro/HoriPro